河内名所圖會

四

ル 4
4565
4

門ル4
號4565
卷4

早稲田大學図書館
昭34.6.19
藏書

河内名所圖會卷之四目錄

志紀郡

當宗神社　妙善堂　木槌樹　土師寛址　塔古礎
允恭天皇陵　天穗日命ノ社　二本杉　龍池　八角冢
道明尼寺　鎮守　硯清水　龍水　菅神廟碑
天満宮　三社神祠　八角祠　白玉丈祠　神寶
藥師堂　名畫繍
本堂　太子堂
厅足羽川
市邊墓
伴林氏神社
新大和川
家原慶寺
國府
孝女衣縫墓
舟橋水仙花
築留
志貴神社
黒田神社
小山團扇
柏原清水
總社
志疑神社
三好城趾
木本干飄　名畫

丹南郡

葛井寺　本堂　不動堂　菩薩堂　葛井　紫雲石燈　影向石　鐘樓　二王門　業平第　什器
長野神社
沙門慶俊
葛井寺戰場

滿願寺　仲哀天皇陵　仁賢天皇陵　野中寺
観音堂　地藏堂　瑪瑙三石　古礎　経藏　太子開仰井　楊枝井
鎮守
埴土阪　野中神祠　羽曳山同野　辛國神社
大津神社　櫟本神社　丹比野　丹比神社
萱生神社　荒陵　河内鍋　日高臺古蹟　繪藏
油淵　大野關趾　狹山神社　狹山堤神社
名産蓴菜　東餘下川　西餘下川　狹山池

丹北郡

雄畧天皇陵　忠臣隼人墓　阿保親王故墟　親王池
來目皇子墳　天滿宮　柴籬宮　廣庭神祠
田坐神社　酒屋神社　川邊橋　樟本神社
守屋城趾　志紀長吉神社　瓜破　中臣須牟地神社
阿麻美許曽神社　布忍莊　布忍川

八上郡

丹比行宮　金岡故居　金岡神祠　金岡淵
須牟地神社　名産蘆

澁川郡

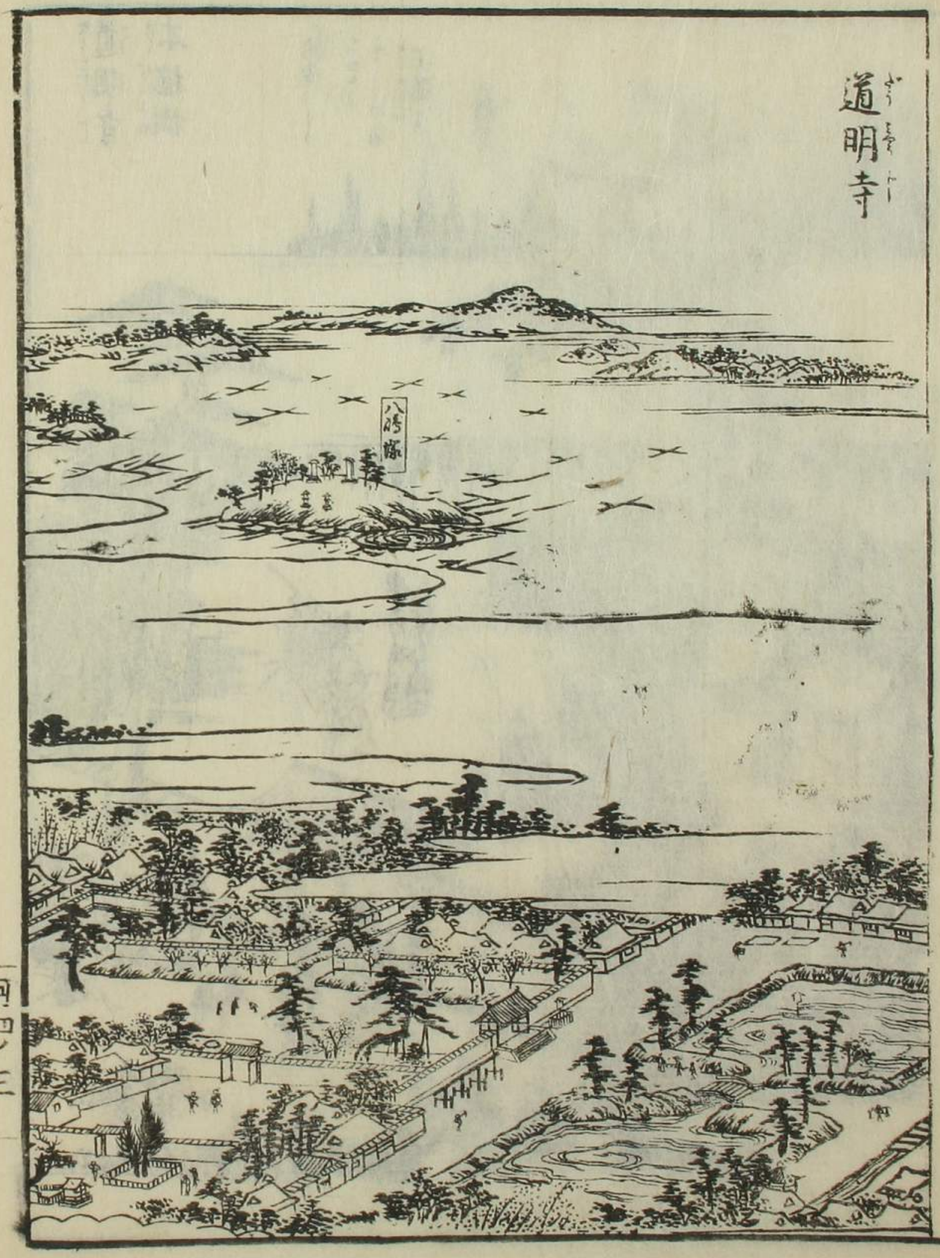
澁川神社　龍華寺古蹟　跡部神社　真觀寺
亀井　勝軍寺　本堂　觀音堂　額　馬蹄石　神妙椋　鎮守
什寶　守屋墳　守屋頸濯池　顯證寺　蓮如松　含月亭
麟角堂　久寶寺城墟　許麻神社　觀音院
伊賀々川　龍眼泉　横野神社　横野堤

都留美神社

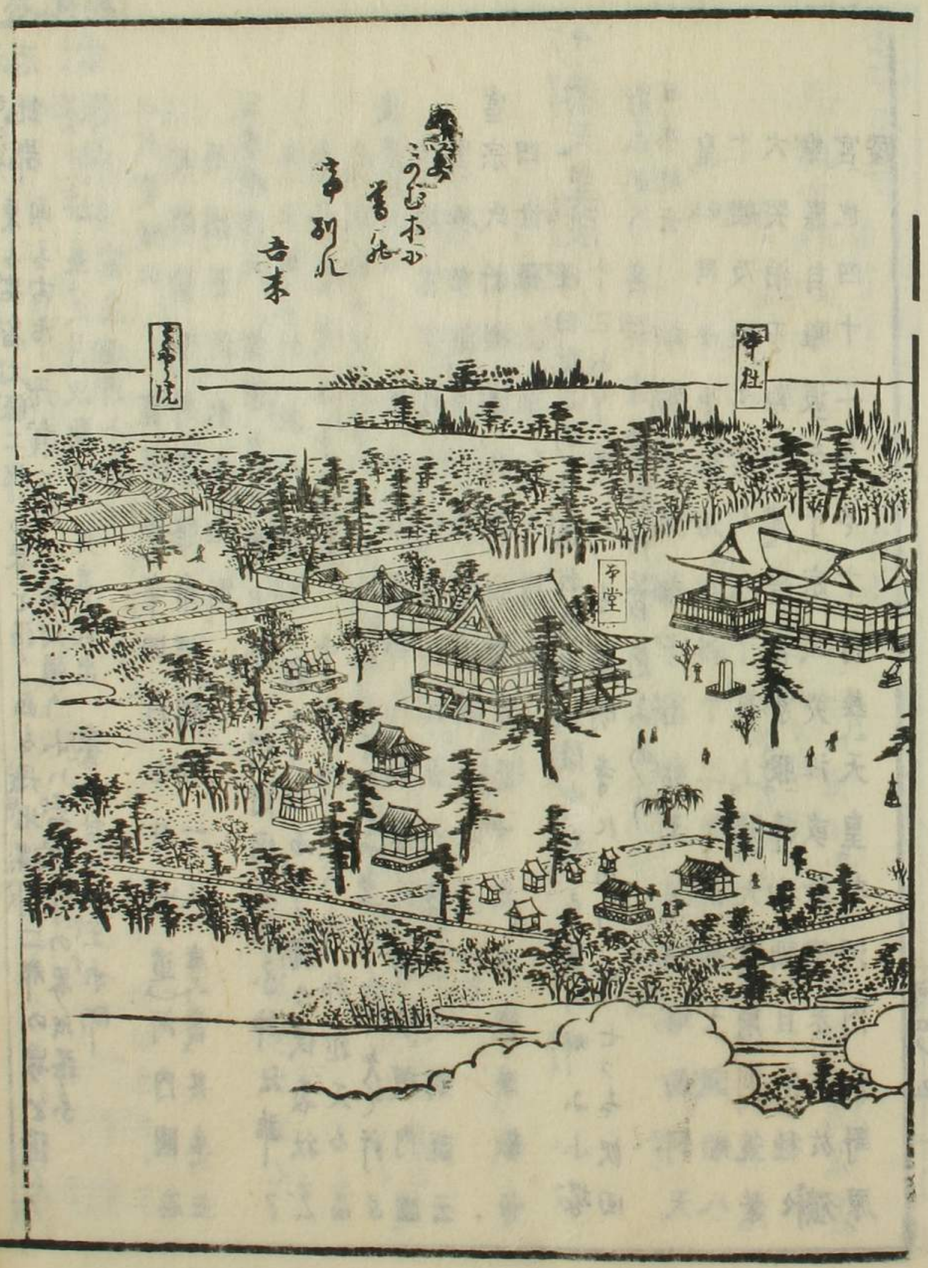
若江郡

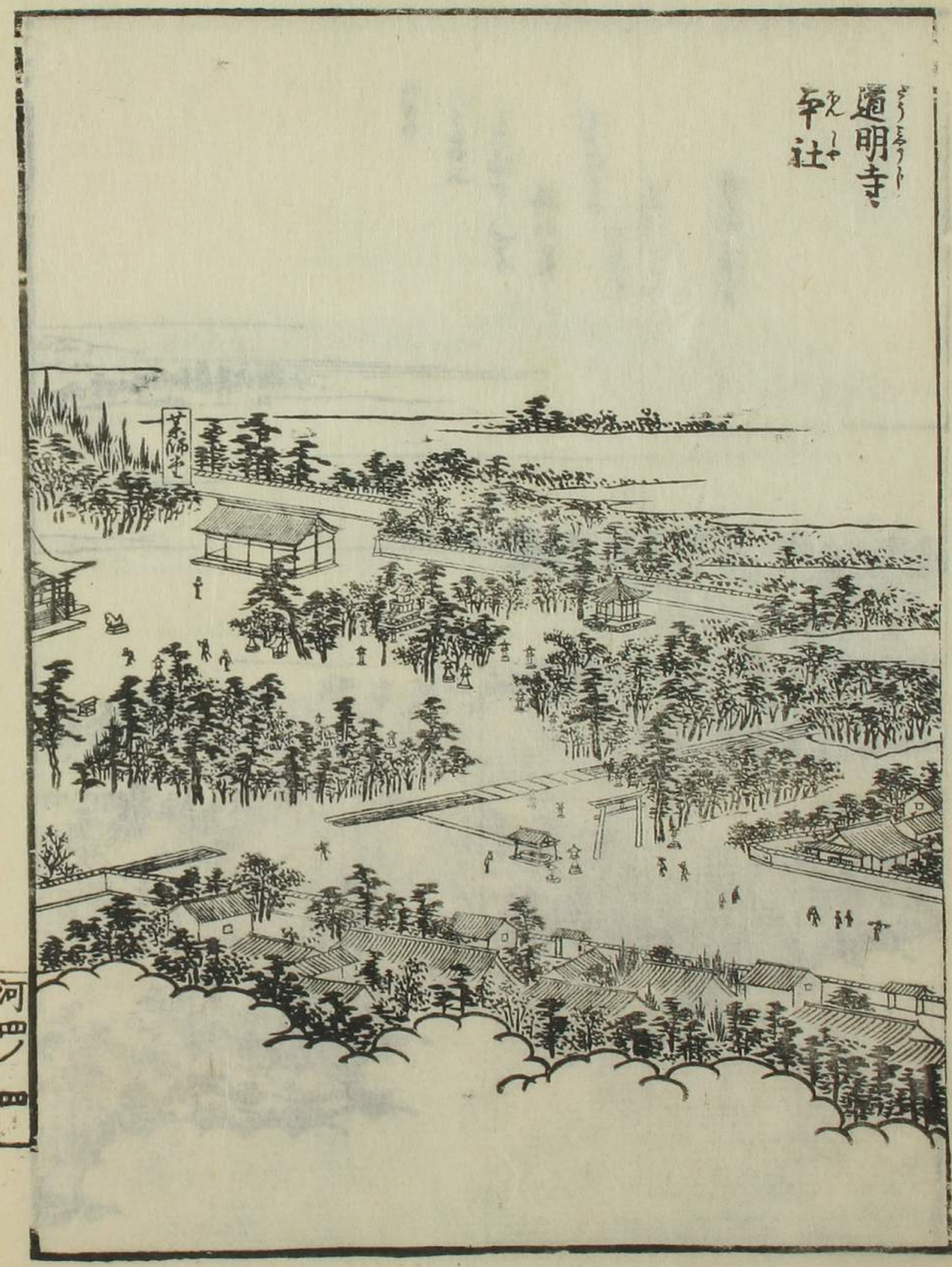
弓削行宮　弓削神社　都塚
都留美島神社　八尾木鷺　弓削河原　高松塚
明川

由義宮
玄賓僧都址
泊魔堂
鐘堂
栗栖神社
若江城墟
彌刀神社
山口重信墓
鴨高田神社
弓削寺蹟
物部尾輿址
額
勝堂家戰死碑
長栖神社
鏡神社　雷神石
川俣神社
蒙額
石川丈山
碑銘
羅山子
長瀬川
常光寺
本堂
阿弥陀堂
大信寺
鐘楼
空風呂
玉串川
加津良神社
宇皮神社
稲葉里
長瀬堤
舎利堂
鎮守
成思庵
坂合神社
石田神社
木村重成墓
仲村神社


道明寺
八嶋隊

梅の花
八嶋


吉未
神社
本堂


遍明寺
神社
河田八目

志紀郡 東は安宿郡に接し南は古市郡に接し二郡の界を張り西は丹北淀川二郡の界を張り北は若江郡の界を張る

當宗神社 並に大月次新嘗 延喜式出 譽田村の北王松所

三代實録云 寛平五年四月七日始て遣河内國志紀郡當宗神祭幣帛使國司一人專當其事並用國正税永為恒例

公事根源云 當宗ねふ上酉の日是を河内國の伊勢神社と云

年中日使云 當宗ねふ上酉の日杜本當宗いねうの使を遣す

宗乃ち先ふ下向に

宗氏物語に云 仁和の比の頃社家の使を遣す

浅深秘抄云 寛平法皇御外祖母氏神在河内國

所謂當宗社也仍て自仁和五年被祭之或説云

當宗氏新撰姓氏録云 當宗忌寸出自後漢獻帝

四世孫山陽公之後也

允恭天皇陵 澤田村に在り惠我長野北陵也

十三あり内三つは道明寺に在り内七つは沢田

村に在り其所古室村の内

日本紀云 皇反同母弟也治世四十二年新羅王調船八

雄朝津間稚子宿禰天皇允恭瑞齒別天

十艘及種々樂人八十貢上聞天皇崩到筑紫

大哭泊于難波津皆着素服捧御調且張種種

樂器自難波至于京或哭泣或歌儛參會於殯

宮也四十二年冬十月葬天皇於河内長野原

陵

道明尼寺 土師里にあり土師連聰寺村と云

真言律宗 女僧寺職也

天滿宮 御自他現在の神 新仏祭所一殺の神 製他世の荒木の

天神也称れ後の覺素尼公御他也

傳云菅丞相筑紫へ左遷の時道明寺に

在を伯母沛都の沛許へ立寄給へり

あけぼのの風吹めぐり

寺號曰沛神社

鳥波社別當憂計連鳥乃青之無羅牟里濃曉裳蛾菜

至今邑人忌畜雜

鳥井額 竪額正一位大政大威德天神と書

實鏡寺宮理豐德嚴皇女御筆

幣殿額 竪額天滿大自在天神と書

妙法院宮堯然法親王御筆

十一面觀世音 本堂に安置菅神自他長三尺許寺記云

元慶二年当寺に於て菅丞相一夏安居

ひ一刀三禮して彫刻たり上

号仏像

釋迦佛 本堂中央に安置立像長三尺許

試觀音 長弐尺許丞相右の大悲の像彫刻志給へり以来沛試に

仏を拝ませ給へ之故に号

覺壽尼像 本堂に安置菅神是善卿沛妹菅神沛伯母君那

幼少より出家の志強し尚寺旧名を土師寺

号しく氏の沛寺と云

国郡の比例にしたがひ今に至て

云容の息女坊中に止住

本堂額

横額 道明寺と書ク
實鏡寺宮理豊比丘尼御筆
某年月日豊臣関政所の御念持佛

藥師堂 本堂の東側にあり 當寺へ寄付

太子堂 聖德太子二歳孔子十六歳の像と安ク
傍ニ佛工定朝の作

妙善堂 本堂の西傍ニあり 延命觀音安ク

天穗日命社 本堂の西ニあり 蔵家の祖神 牛頭天王 婆利
賽 女狐佛せ奉り 河内志云 天夷鳥命神祠天安
二年二月 授二従五位下一 今 祭二天王一云云
當村の生土神也 例祭九月廿二日

鎮守 紅梅殿 老蘇祠 丘上 若女龍王 辯財天
愛宕權現 多賀 稲荷 [illegible]

三社神祠 本社より北町 寺記云 元慶八年 菅公御 八幡宮 春日明神を
遠寺ニおゐて一夏九旬の間ニ五部の大乘經を書寫し奉り 天照太神
忽然として天童武人 来りて白山稲荷の二神 [illegible]
亟相ありて狐おやしろ 水狐狐ぐ 硯ニ注ぐ
御經書寫の功德狐守 護せんとてうゐ 来現して菅公
書寫速ニ終りて 經巻を思惟しゐ
又忽然として三老僧 香深き袈裟に乃 晶の念珠狐
持 [illegible] 現し [illegible] 狐 [illegible]
講堂の西北方狐訓 [illegible] 仏神 勢石清水 春日の二神 なり
所を穿 [illegible] を石の [illegible] 昇 [illegible] 埋伏 [illegible]
[illegible] 其 [illegible] 本 [illegible] 生 [illegible] 今に盛んなり一説ニ云

聖德太子五部大乘經狐書寫 [illegible]
[illegible] 埋藏 [illegible] 其是 [illegible]
本樓靈樹 三社神の後ニ [illegible] 伽藍 [illegible] 猴の [illegible] 根株遺
枝葉繁茂して盛んなり 清人其實を得て念珠ニ繋ぐ
今坊中ニ [illegible] 狐 [illegible] 生
二本杉 三社の東ニ [illegible] 老杉 [illegible] 三社神 [illegible]
硯水 中門の脇ニ [illegible] 狐 [illegible] 硯を洗せ [illegible] 時

土師八禽祠 石鳥居の祠 [illegible] 社の東南にあり 初ハ天満天 相殿
土師竈跡 中門の西 客殿の [illegible] 昔 [illegible] 偶人を製 [illegible]
古蹟 [illegible] 傳ニ [illegible] 四時 [illegible] 藏 [illegible] 祈願 [illegible] 時 [illegible]
龍池 寺の東にあり 清 [illegible] 泉 [illegible] 門前の蓮池狐 [illegible]
白去支祠 法内ニあり 大サ [illegible] 代の

土師八島家 西武町 [illegible] 五條 [illegible] 黄門の命ニ [illegible] 浪速忠國建碑文 [illegible]
當社天満宮の祖 [illegible] 天穗日命ニ [illegible] 其苗裔 [illegible] 仁天皇紀
七年ニ [illegible] 野見宿禰 [illegible] 勇力の人あり 當麻蹴速少力競 [illegible]
勝利を得 [illegible] 蹴速 [illegible] 腰折田の名狐遺 [illegible] 相撲の始 [illegible]

同

天皇紀三拾弐年ふゆ殯を禁ぜられ其代ゆゑして埴土以ておく
殯偶人を製し後世の法則とす　天皇野見宿禰が智かん
功と賞じて殯葬の役なく土師氏を姓ぬ賜へり（日本紀）厳后　推古帝の
御願ありて上宮太子佛閣を建営し給へ時渡韓土師八幡連が家
と捨て捨金ふかしこれを道明寺と名付ける此八幡を我朝ふかの
今撞鐘の初しなり其撞妙音ありて鬼神も感じ給ふ鈸乃
上ふ彩く異形の者あり来て偶ふ八番いなりなりこれと紀さん
ときく夜更人静く時の調ふ以合く風ひびく其曲ふそ
わが宿のつまふかの聲ときかれもれるこゑも
其音聲の羅しれを変相の者感ふ感ぬるやいとふ
あしかれ糸南ふを所夏火星豊さゆるを人よりものをとゆを
古物紀ふ正しく三反風ふく雑波の方へ飛去ぬ去るの別号と豊邑
ゆふ人を即其部ふを奏しるふ夏火星ときを受惑星ときく南方ふ

栖ぐ國土以守る星形りと我ぞ名ゆ人（傳）仏寺ふ菅丞相の御願君
要比丘尼在ゆひしなば丞相も時々ふ来駕し給へ昌泰四年九月
ゆふりあた詔ありてくさもの人の御身を成ゆひ御伯母御ふ留別ふ
御背顔ありて紫へ御遷り有く三とせの後薨御まし給る
五十五年の後　村上帝天暦九年ふ京師北野ふ神威霊妙所
ふく珍瓏ふ宮殿を営ふ菅賜大政大臣天満大自在天神宮ゆ
詔しく奉幣ある其頃道明寺ふも方三所の杜乃中ふ社壇以
建たるふ梅を植く天満宮ゆ崇たまへいふへを伽藍巍々
ふして巍重ふり土師村の外ふ猶葉美江の二村も寺奉成
しゆ元亀の頃古市高屋城兵乱の時没収せられ寺ふ羅寺
一時ふ煙となる天正年中官より命ありて再興ありしよ
神徳を新ふしく陰晴以爆ば猶人間断ふし
毎歳二月廿六日を令式して遠近諸しく群集ふ　菱公次ノ記ふ
内ふ人の御付河内國人主寄しせ人年ふて書のせ内ざるふや

二人の同
児者
紙をもて
造る風
小おとし
てこれ
を揚る
これ公
いのかと
又考古
もいつ
唐書の
田悦傳ハ
紙を
りて
風考と
造りき
百餘丈を
上る者

射る者〜てこれ公射〜むと
韓信が仇まろい高祖陣猶を征
まる時未央宮の遠辺公まる
階確類書云ふ春の風八下より
しく上ふ
升る
纔
これ
ようて
登る

菅公廟碑 神敢ゝ建京師地海先生撰

従大臣正二位源朝臣前豐卿鉉拜撰

河曲合離謹書并篆額

丹北山彰恭建

贈太政大臣正一位菅原公其名德登庸一時搢笏三台儀百司其忠誠溫克徽猷偉範百世而必論也輔理贊化之暇能以文師表于是天怒人怨象緯錯行雷霆激變乃輙發金勝之悔馳壬節之重焉而後使追贈褒恤之典建廟致祭之議靡弗崇厚隆公在天之靈以維新矣然則不特國家之上為黎庶之甘霖日月以介福在野儒術文藝之士追慕景仰而褒區男女無貴賤災殃寃苦地凡有求必祭禱焉蓋公之精誠能感動天地而人之欽戴公也亦復出于至誠至信以故神感靈應影響于古今世之之于傳不可誣也其或祠廟京之北野筑之宰府亡論耳其他郡邑無有不祠其或在時輪蹄所歷磬欬所存必祠祭之以表甘棠屋烏之敬愛而河內州土師邑道明尼寺中所祠屋烏之敬愛而河內州土師邑道明尼寺中所

朝而賜祠祭最有緣由云

公之遠祖土師八島搶地造寺曰名土師氏世稱檀越土師氏公爲姓菅原有尼覺壽住寺於是土師氏公歲時存問且覺壽寺境清寂留或旬餘是以賦詩詠歌其西遷倉皇猶且請于朝而來告別留宿依依繾綣弗忍去也雞鳴歌可徵焉夫惟公亦猶日月之明洋洋乎寰區來享弗多各處所祠祭之昭明精爽方寰圓隙靡上弗透射其將奚疑雖然以私測之豈莫差次乎今以地則鼻祖所受以親則遠祖所造以公之姨住持以境則公之遺愛寶劍寶鏡石帶象笏留或旬餘是以公愛其清寂詩之歌之其他手澤所存藏至今不啻甘棠屋烏也由是言之景仰明尼寺中所此安適抑道明尼寺壁造也威靈於千載之下者捨女僧相承多出于簪纓華族而主法清肅戒律堅固人無間言此其雖曰無尼寺之威靈也距今千有二百年要之公在天之靈保護之於冥冥中者非耶本州一屋村北山彰好學無二夢寐斯文仰慕公之學德且以地境隣近故拜趨最謹焉乃欲請言於綬鐫石以傳不朽而會內大臣源公聞其舉親製銘賜之焉彰字元章本姓橘氏楠公之胤與綬誼在久要顧綬未學謬劣足記公之明德亦唯閱寺記所載錯綜成編以應其求云銘曰

公之遠祖土師八島搶地造寺曰名土師氏世稱檀越土師氏公爲姓菅原有尼覺壽住寺於是土師氏公歲時存問且覺壽寺境清寂留或旬餘是以賦詩詠歌其西遷倉皇猶且請于朝而來告別留宿依依繾綣弗忍去也雞鳴歌可徵焉夫惟公亦猶日月之明洋洋乎寰區來享弗多各處所祠祭之昭明精爽方寰圓隙靡上弗透射其將奚疑雖然以私測之豈莫差次乎今以地則鼻祖所受以親則遠祖所造以公之姨住持以境則公之遺愛寶劍寶鏡石帶象笏留或旬餘是以公愛其清寂詩之歌之其他手澤所存藏至今不啻甘棠屋烏也由是言之景仰明尼寺中所此安適抑道明尼寺壁造也威靈於千載之下者捨女僧相承多出于簪纓華族而主法清肅戒律堅固人無間言此其雖曰無尼寺之威靈也距今千有二百年要之公在天之靈保護之於冥冥中者非耶本州一屋村北山彰好學無二夢寐斯文仰慕公之學德且以地境隣近故拜趨最謹焉乃欲請言於綬鐫石以傳不朽而會內大臣源公聞其舉親製銘賜之焉彰字元章本姓橘氏楠公之胤與綬誼在久要顧綬未學謬劣足記公之明德亦唯閱寺記所載錯綜成編以應其求云銘曰

惟岳降靈　大闡儒風　懿行可摸　惟誠惟忠
五教戸到　文化日隆　台曜愛和　萬物斯從
夷險一塗　天鑒豈空　封祠千載　比德青松
神威如在　拜趨仰宗

安永四年歳次乙未十二月六日

○道明寺神寶

八葉御鏡　勅封此神　境内天満宮神體なり　往昔　花園院御宇
延慶三年和州室生山に傳法灌頂あるし　時嵩玉石神
西林寺の鍛冶上人導師として　天満宮に向ひ　くて告る日
道明寺は八葉の鏡を我が　沙門摸し　是鍛冶奏達し　勅封を下し
向へべし　祀し　因是鍛冶　中御門院帝　叡覧の時神加封あり
近年享保十二年　霊元院帝　天満宮楊枝神影　菅神八葉鏡に移させ　楊枝
天満宮楊枝神影　菅神八葉鏡　菅神　仁和二年　又一夏　弘法寺に於て
御硯　菅神四十寮の神時　佛　紙写し　白山猫の表神硯を
硯　菅の水を運ばせ　神　硯に

阿字鏡　寶劍　二品の菅神　時に神鏡に　阿字の紙書
阿字鏡　寶劍　安居し　時に神鏡に　金泥　阿字の紙書
神童現し　神勅にて　八幡宮七ヶ日参拝し　七月十四日の夢
神童現し　神勅にて　寶劍を賜ふ

般若心経　阿弥陀経　二経　俱に紺紙銀泥　書写し

石帯　一角勢　掃部　中に神掃　馨武節方之

五股鈴　小刀劍　柄に鳥屋節　俱に菅公神の佩神遺命　所持
此六品は菅公薨　より　光孝尼へ神　紀念
らして賜るもの　品器なり

瑠璃壺　絞州　佐の　海渡
龍女現し　器

佛舎利　五粒五色菅公年久し　光孝尼へ菅公　光孝尼へ神の時
符外寿一品多し　尼寺坊中に　光孝尼へ神の時

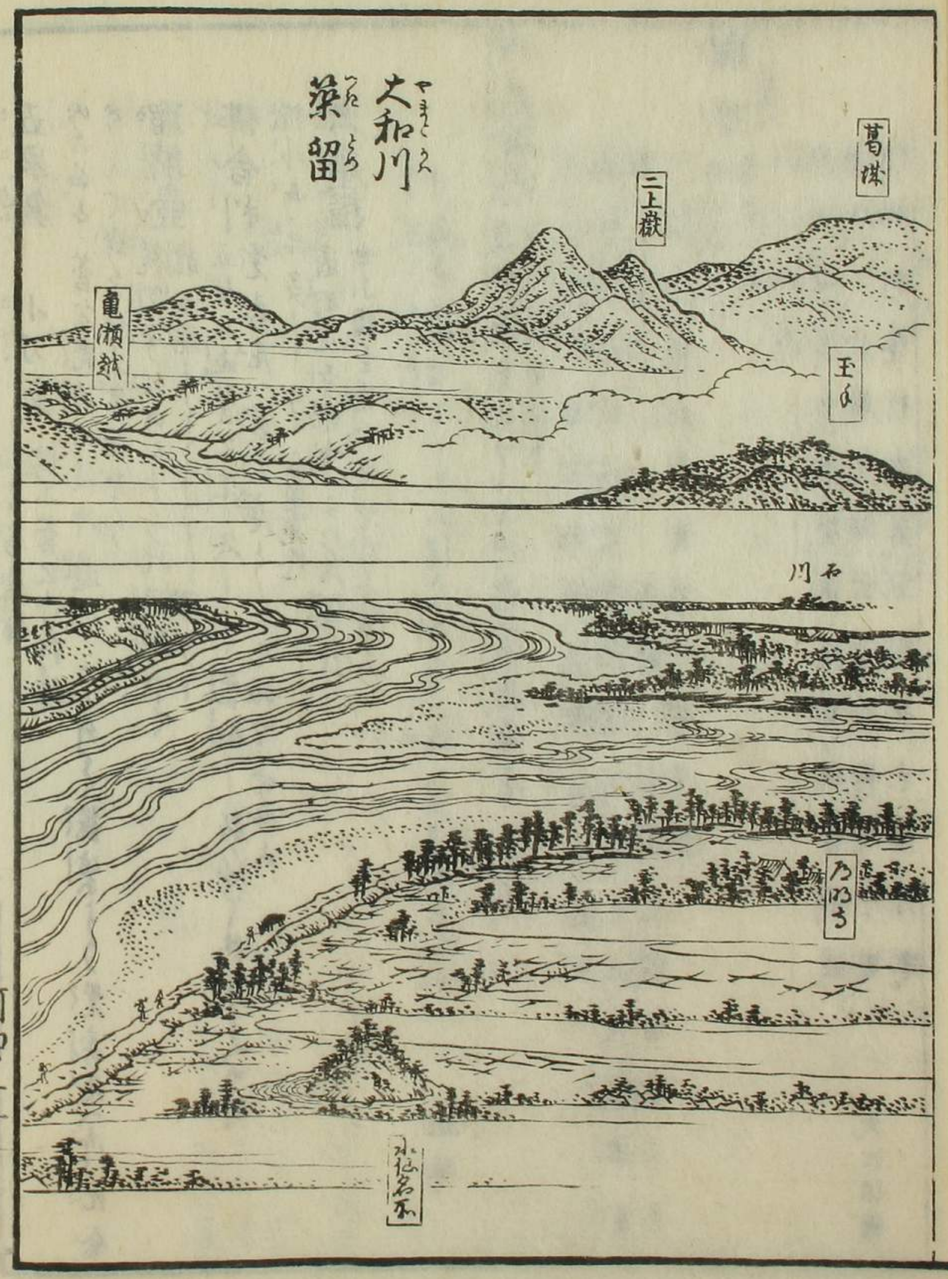
名産糒　通明尼寺坊中に　世に糒を通明寺　通明寺に糒

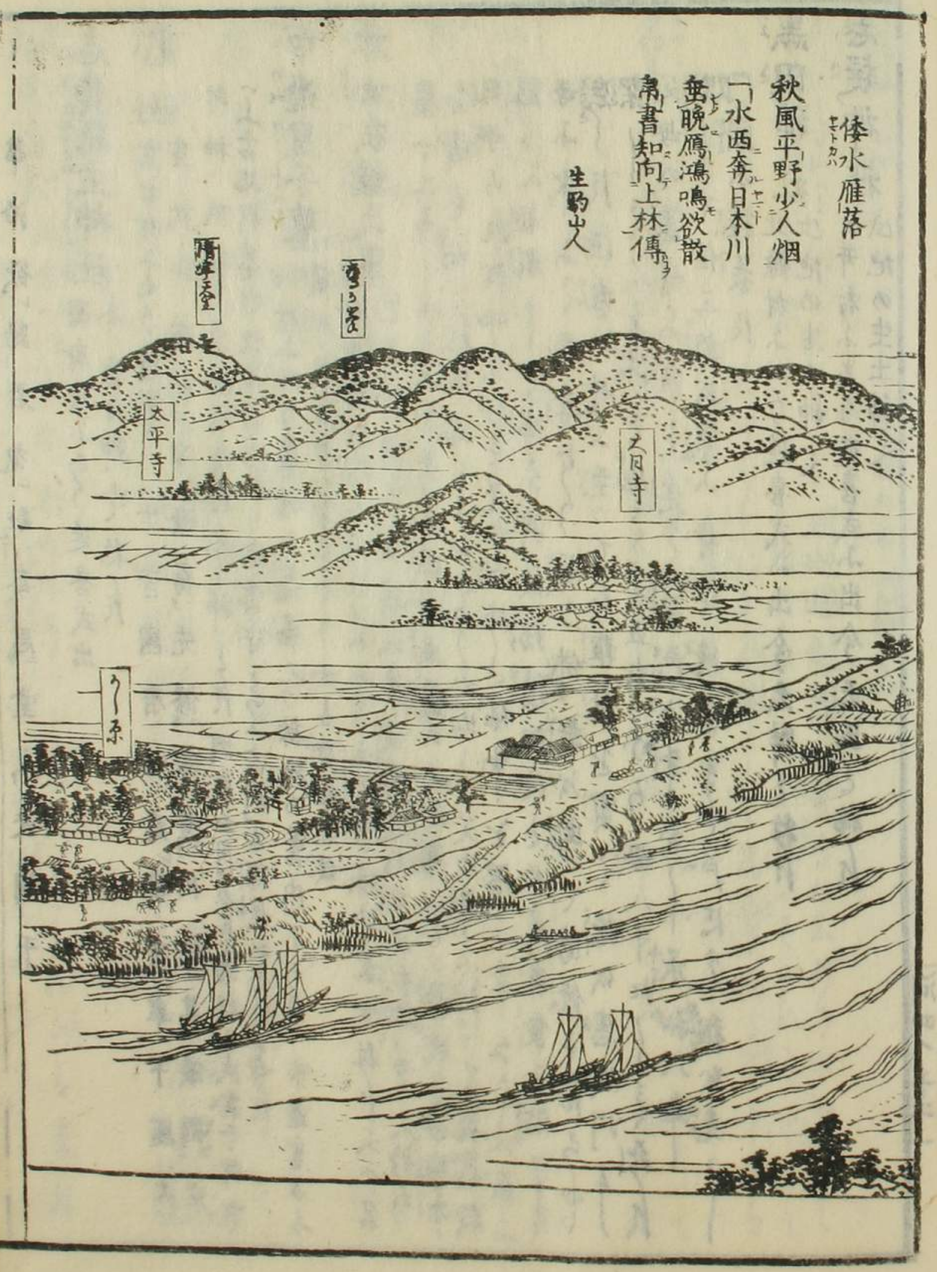
于飯を道　はちすの名産　乃ちる花の名産　班竹

庁足羽川　岌郡東界　又河内の大橋萬葉に名
石川の旧名称　見河内大橋獨去娘子歌一首并短歌
級照庁足羽河之左丹塗大橋之上從紅葉
数十引云反歌大橋之頭爾家有者
心悲久獨去兒爾逢戸幣申

國府　村の名　属邑一村
無題詩　府一下　即一事　属一相　歎一為　是詩一朋　會遇難
河州底事　酒酌十分　鱒下一酔歌　傳五橋境一中寛
陀一郷秋暮行衣薄　旅一館曉來落一月寒

大江佐國


大和川
藻留
葛城
二上嶽
亀瀬越
玉手
石川
乃川
水越名所


倭水雁落
秋風平野少人烟
一水西奔日本川
無晩鴈鴻鳴欲散
鼎書知向上林傳
生駒山人
清涼寺
雲ノ井
太平寺
大日寺
うの原

志貴縣主神社 國府村ふあり延喜式出今春日神を称し

總社 總社村ふあり傳云 士 昔國府必建レ社有レ事ニ于國内宮社則國司率ニ僚属ニ先修ニ曲禮ニ於此其儀猶京師神祇宮 當村國府村生土神と云ふ古跡ハ碁水蛇見沼あり潮青寺と云ふ古刹ハ獨長和中奪ハ荒廢三ツ林村の籠内ふあり 市邊皇子墓 國府村ふあり墓畤ふ葬一皇子ハ天皇第一皇子ハ市邊皇子ハ

孝女衣縫氏墓 國府村衣縫千軒河ふあり土人傳云 衣縫氏ハ衣縫造の女志紀郡ハ人形乙子ふ家 傳云 衣縫氏ハ衣縫造の女志紀郡ハ人形乙子ふ家 傳云 衣縫氏ハ衣縫造の女志紀郡ハ人形乙子ふ家

黒田神社 北條村ふあり延喜式ふ出今天神と称ハ

志疑神社 上井村ふあり延喜式ふ出今天王と称ハ

伴林氏神社 林村ふあり

名産水仙花 舟橋村ふあり

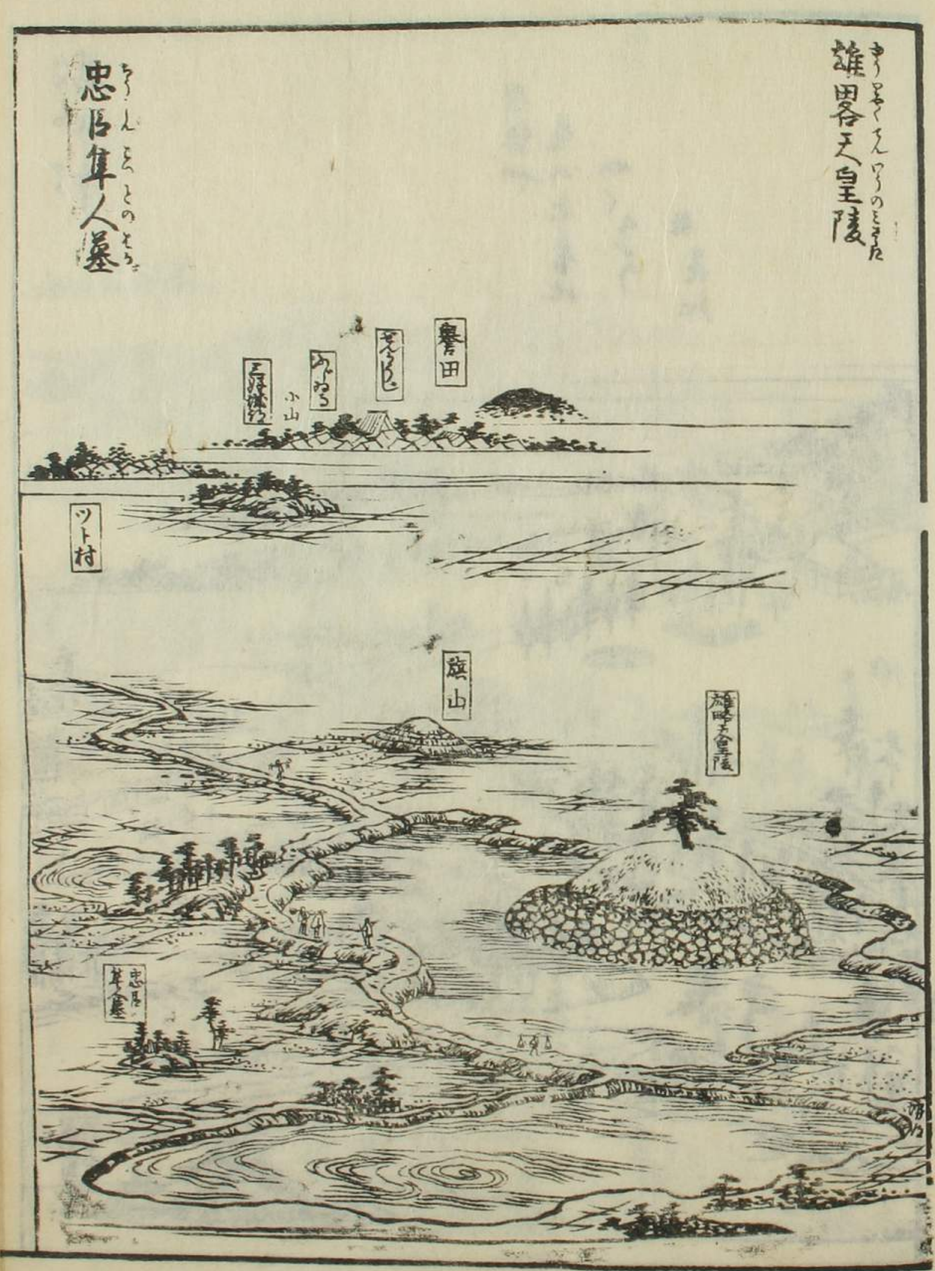
名産小山團扇 小山村ふあり

三好城址 小山

新大和川 大和川の二流

築留 古流の跡ふ堤を築くこれを築留と云ふ

柏原清水 柏原村



同云延宝のころ浄久が郭公の発句を書ふ之書表ふ[illegible]ま[illegible]ていまの地名の郡中問ふる主志紀郡中書ふれしと

夏川の流れ志紀郡なる

又鄭室老人の筆なりと遺を一軸あり其書云

[illegible]

皆人乃是藤の[illegible]や[illegible]

拘原浄久の門[illegible]記[illegible]

是老が作を売筆[illegible]

[illegible]

速化を書付[illegible]

玄旨法印

長頭丸

一囊軒貞室

浄久

滝夕

此三臣氏浄久ゑ延宝七年河内名所記[illegible]

李兮菊の序あり又句集[illegible]

[illegible]のや[illegible]

此集を[illegible]

樂書の[illegible]

名産本中軒瓢 本中村ふるを製し又沼村の南[illegible]永享寛正日[illegible]

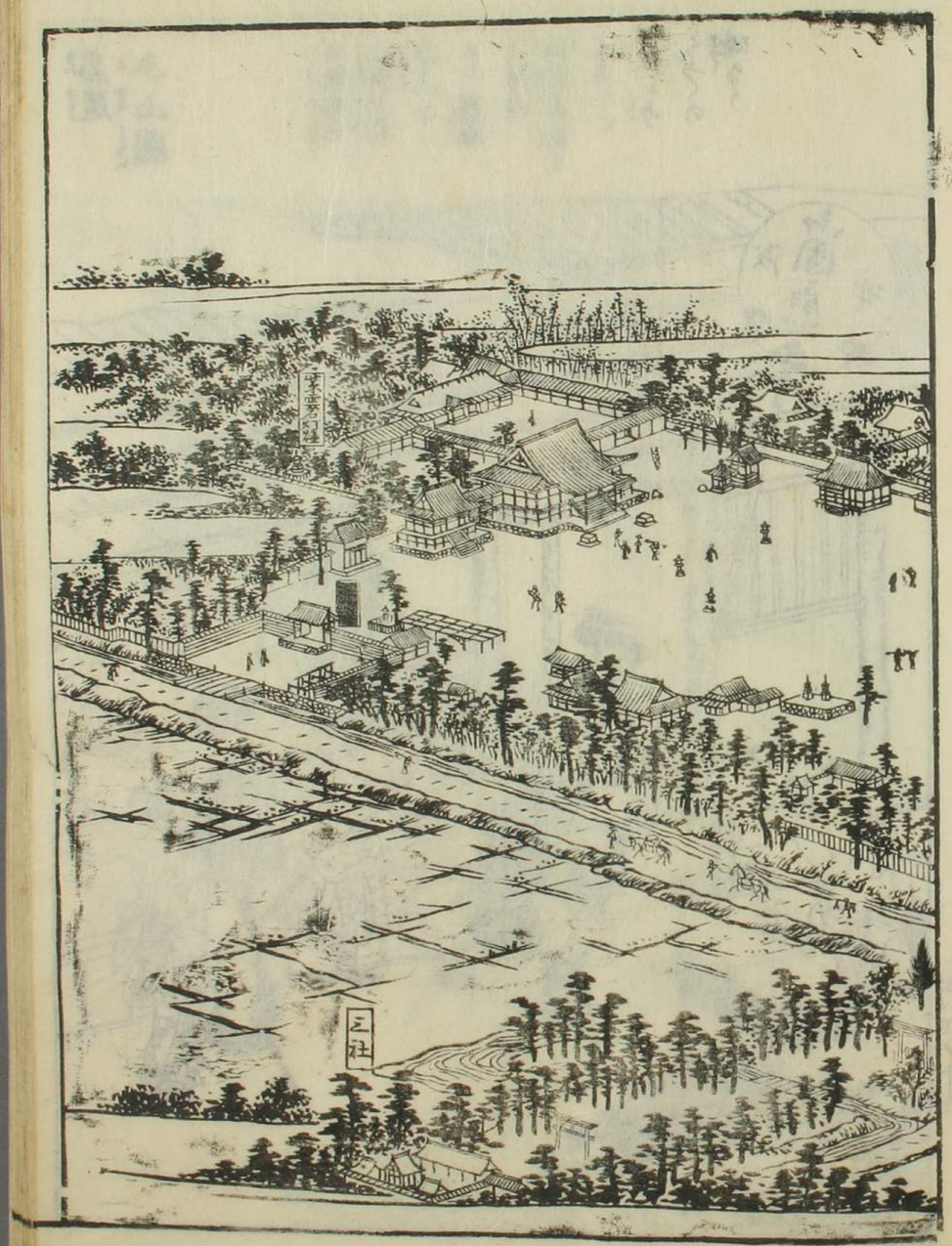
熟もれたる赤く肉軟之遍明寺 是照院相國[illegible]

又棉布い本中村ふ[illegible]

家原慶寺 老原村ふあり天平[illegible]八年二月 帝[illegible]

[illegible]日本紀延喜主[illegible]式云文[illegible]二千米[illegible]

葛飾寺
深紙や
茶の色書比
ふくふぐり
俗花紅
河田ノ十四


三社

名選
小山園
立難組云
定明以前
扇ふし
多く團扇
と用ゆ
加刮義解云
うちへ
ふくの
中國扇
河田ノ十五

扇
ばかり
出ーー
至長屋の
うちへ
文暢

丹南郡 東へ石川 古市二郡の界 北へ八上及泉州大鳥郡の界を限る 南へ御陵の界 西へ堺の界 北へ志紀 丹北の界 西へ堺

紫雲山葛井寺三寶院 葛井寺村にあり 真言宗 一名圓珠寺

本尊千手觀音 脇 文會 脇 主勲の作 長四尺八寸 一千四十二臂 脇士 地藏 觀音 正觀音 安倍 倶 不動 毘沙門 長谷寺 本尊の作 長谷寺本尊の作 長谷寺 西國巡禮三十三所の中 第五番の札所 本尊 西國巡禮三十三所の中 第五番の札所 本尊

葛井 野中 裏にあり 今藤裏 旧跡 石 伽藍の礎 多

大威德影向石 本堂の西

菩薩堂 本堂のお西側にあり 鐘樓 本堂の東側にあり 本堂の西にあり 不動堂 本堂の西にあり

鎮守 牛頭天皇 荒神祠 樓門 持國 增長の二天 広目 多聞

紫雲石燈籠 聖武帝御寄附 方丈の庭中にあり 石の色紫なり 細密

業平屋舗 方丈成就寺の庭 奥院の旧跡 業平朝臣造立の

當山の寺記に三條西殿内大臣實隆公の御筆 世に逍遥院と云 其記に云

裏寺に 聖武帝 叡願あり 建立の伽藍行基菩薩開

眼供養の梵場 加之 平城帝の御願 阿保親王再造の

大威德天王影向不斷の靈跡金剛金峰兩山の肝心 葛本緣起に云

葛井寺 葛本の西門 本尊 脇 文會 脇 首勲の聖作

千手千眼觀世音菩薩 本尊 和州長谷寺大悲の同木妙相

端嚴 感應無雙 尊像三十三所巡禮の地 諸佛 法輪

利生の御願 茲に明應二癸丑夏一國の乱 兵火 羅

樓門中門三重大塔鎮守 業平朝臣造立の奥院 焼亡

畢ぬ 堂 寶塔巍然 てこれあり 仏像

衆僧の願を諸檀那 力 勅 奮基 又永正七 八月

八日曉 大地震 一寺滅亡 本尊 無 未聞 帝代の神変

一刹伽藍の退轉 衆生 振化の方便 誠 歎 中 敵 狀 願

人々宜 伽藍再營の志 勵 一紙半錢の少財 願

彩 慈心を運 丈以千手觀音 四八端嚴 慈

三千巡覽の導師 一見一禮者 永離 惡趣 二世の願

滅しむべき者多り仍寺記如件

永正七年十一月日

葛井寺什寶

後醍醐天皇綸旨　二通　同和歌三首　松虫之鈴　眞如法親王特物
楠正成菊水旗　一流　楠正儀壁書　一通
高越後守奉書　佐久間壁書　一通
地藏尊　正觀音　眼土　阿弥陀佛之像　惠心作
不動尊之像　智證大師作　佛舎利　聖武帝所寄
十六善神　琢慶筆
寶頭盧尊者　行基作
寺中伽藍古圖　土佐將監筆
大般若經全部

葛井寺戰場

正平二年八月十六日楠正行精兵三百騎とうんく北軍を大將細川顯氏ゲ三千騎を殺しつく勝利を得し所なり

太平記

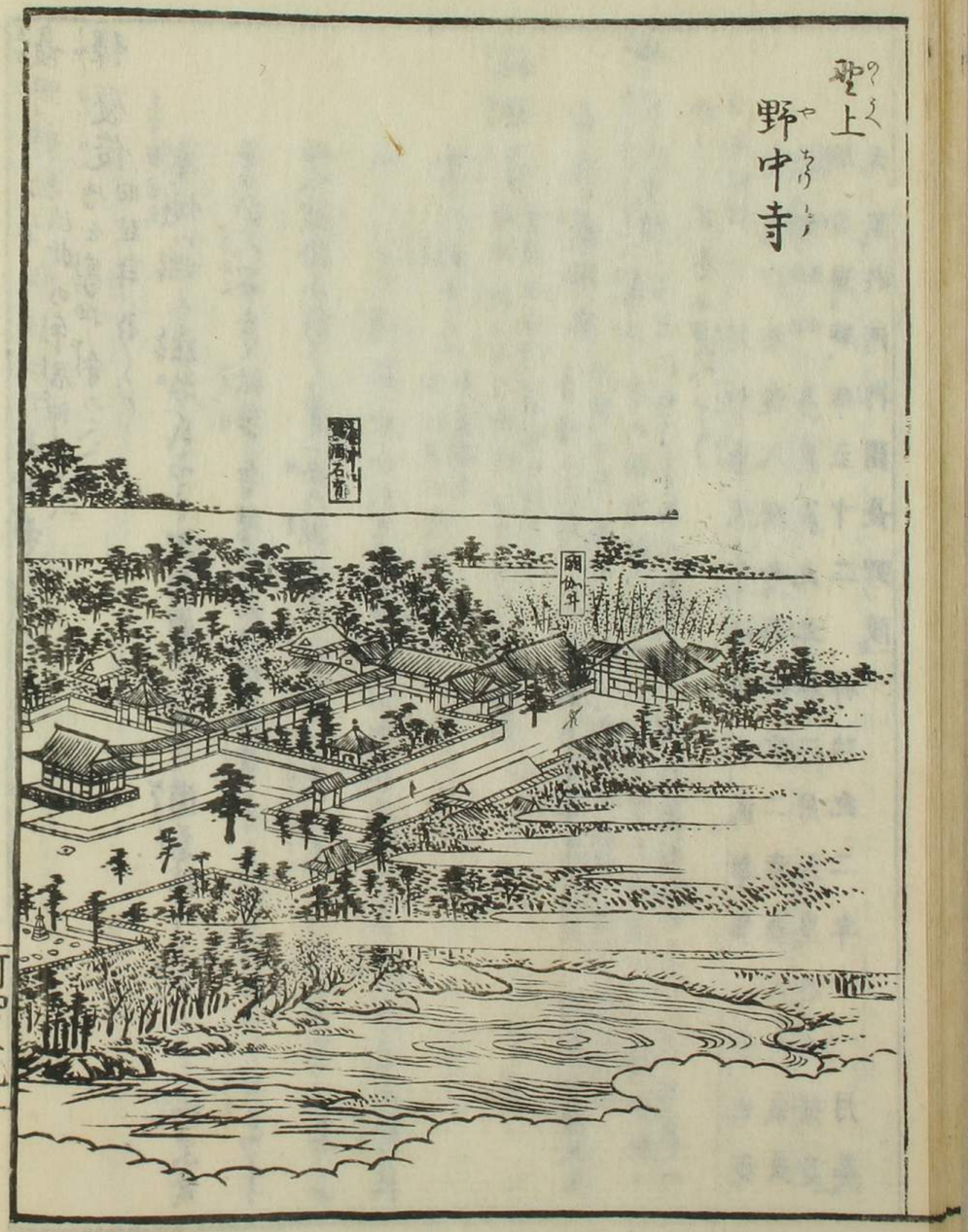
楠帶刀正行と父正成ゲ先年湊川へ下りつゝ時思ふ様あれ今我の合戦ふ我を必討死すべし汝い河内へ帰く君の命ふ成せ給んぞ所存有樣を見果まれと申含めしつゝ其庭訓を忘れ十餘年我身の長成侍く討死せし郎従共の孫を扶持して何ふまして父の歎を滅し君の御憤を休めまゝんや肝肺を若しめて我ゝ見る光陰ふ

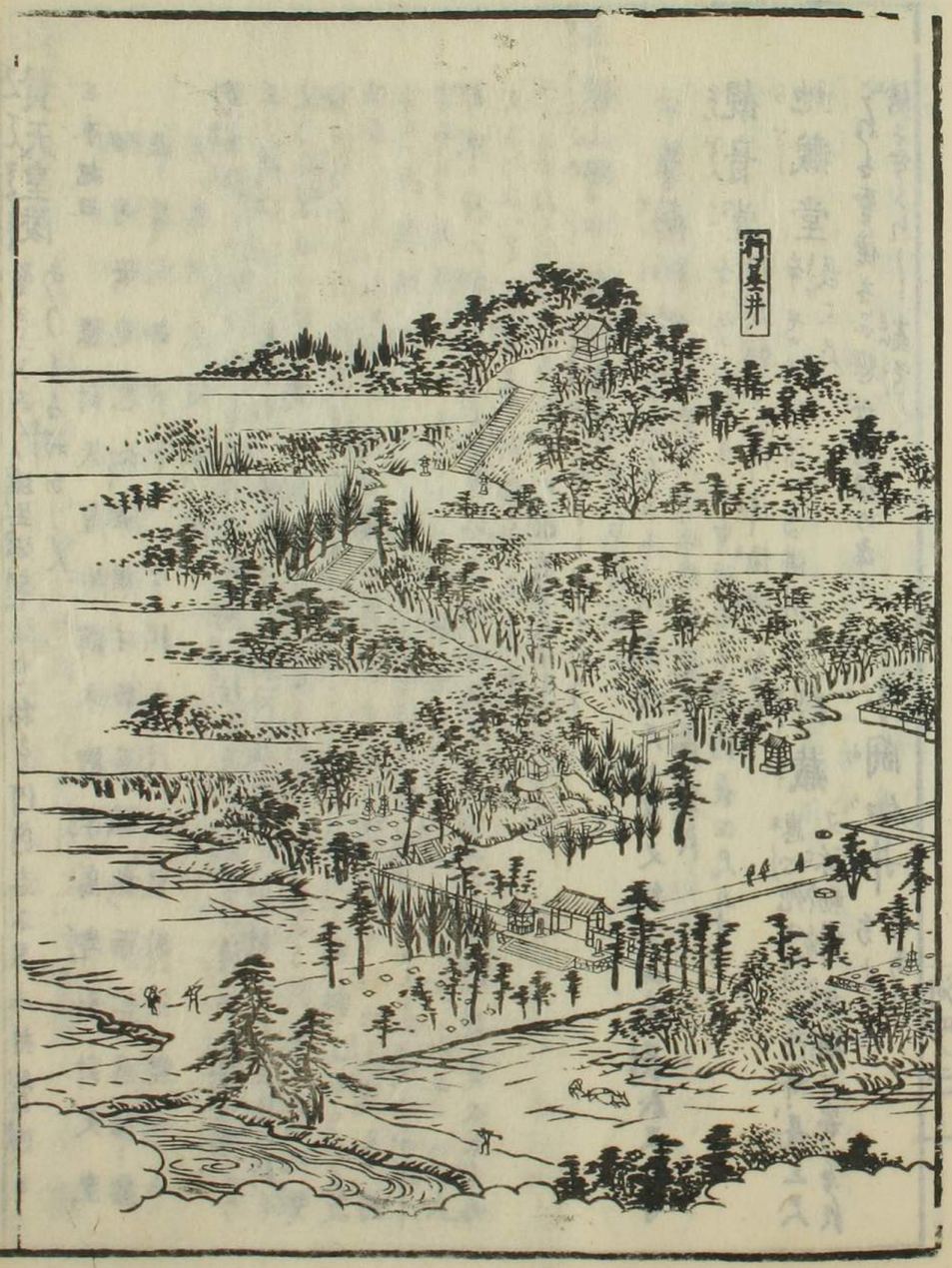
閑寺らかし第撰く正行既ふ廿五才今年い弱冠ゲ十三年の遠忌ふ当り四月ゲ供佛施行の儀若心の為して今ゝ命惜しも正行ゲ為れを其勢五百餘騎ゲ率して時ゝ住吉天王寺を発く討出ゝ中途の在家ゲ焼拂く京勢や我ゝと待ゆけゝ将軍ゲ為れを聞給て楠ゲ勢ゲ分寡ゲ多ゲ敵ゲ多ゲ我ゝ是ふ者を焼を侵し奪れく洛中騒ゲ強く東天下の物嘆武將の恥辱ゲ為ゲ馳向く退治せよやて細川澤奥守殿氏ゲ大將ゲして宇都宮三河入道佐々木六角判官長左衛門ゲ松田治部左衛門ゲ赤松信濃守範資ゲ各身命ゲ為る範貞村田宗良清坂西坂東菅家の一族共ふ都合三千餘騎河内國へ発下ゲ武勢八月十四日平別ふ葛井寺ゲ為て着くゲ為ゲ此陣ゲ楠ゲ舘へゲ七里ゲ隔ゲ為ゲ為ゲ給ゲ急々ふ寄ゲ為ゲも明日ゲ後日ゲの間ゲ為ゲ寄んぞうんし来勢由断して或ゲ馬蹄を下して休る所ふ攀田八幡宮の後形ゲ山陰ふ菊水の旗一流ゲ目の見へく初ゲ申の兵七百餘騎ゲ用々ゲ馬ゲ歩ませてうち寄

こうスハヤ敵の害こうるハ馬ふ殺をけ物具せよと云しめ元をめく所へ正行
真弟ふ進こく嘆て急へ入ル大将細川陸奥ふ獲をそ肩ふ乗こてれども未上帯
ふも〳〵得ぞを刀ふ帯ぞさ落も方こ見こる間村田の一族六騎小具足計ヲ
ひこく誰が馬ふも乗こ上こ乗こ打勝て如雲霞群こ拒こる敵の中へ急へこく
火ふ放しそ焼ふこるこんぞ続こく味方ふ乗こんを大勢の中ふ被取巻村田の
一族六騎を一所ふて討れふ乗其間ふ大将も物具ぞ馬ふ打乗こ和歌〳〵
兵百餘騎皆文こく乗こう敵を小勢ふ味方を大勢ふ縦進こ急今〳〵ぞ
乗こく引退こ無ぞふ無うぜば永勢乗こく員ふ〳〵ぞを諸国の駿武者ふ
支て戦へど渡ふ拾敵打て引ふ楠勢勝ふ乗て退急しこ大将天ふる渡也
ふく危見へこれを六角判官今貴六郎左衛門返し合こく討れふり赤松
範資今身範貞今ふ乗ふ換こく討死ぜん中取て返し七八度ぞ踏止こく戦
篠ふ宗良親王栗生田も討れふり氏ふ乗ふ支られこく敵こ囲ぞ〳〵退ぞうれた
大将も士卒も危今ふ助て告永へぞ帰ヲ上こうふ所

長野神社 鎌延喜式出 葛井寺の鎮ふあり
式所の本居神こ〳〵
釋慶俊 伝云葛井寺の人〳〵
旧跡 詳ふ〳〵
元亨釋書云 慶俊ハ姓ハ藤井氏ふこく河内国の人ふり道慈法師ふ学て三論宗ふ
学び大安寺法華寺等ふ居住せ所嘗こく永師愛宕山ヲ辟ま〳〵
ゆ〳〵彼地ふ移こく茅一世の祖こんこれば 光仁帝御宇天應元年ふ
あこうて八僧都ゆふれこり其性慈悲の懇篤こく貧者病者ふ施ん
半ふ好めり 神社考曰慶俊ハ西寺者也
満願寺 堅中村ふあこり野中山ゆ号ハ真言宗
聖徳太子沖建宮の地ふこうり
本尊薬師佛 産像を天武す又十一面観音立像を天八寸 漢字牛頭天王
式所の本居神こ〳〵什宝ふ屋画佛絵廿七幅あり
仲哀天皇陵 葛井寺の南岡村の菅内ふあり 本王廟陵記ふハ御陵那一
上へ原にあこうこれん 拙こうふこれを高向王の墓ハこく後ふ
ふ〳〵本巻ふ見へ 足仲彦天皇 日本紀曰 皇后曰 兩道入姫命 同御宇二年春正月氣長足姫皇后 為皇后九年春二月天皇忽有痛身 明日崩時年五十二 祥功紀二年十一月葬 天皇於河内国長野陵 新日本武尊第二子也母

聖上
野中寺





仁賢天皇陵 聖々上ふあり埴生陵と称す陵中に河内志ふ黒山村と記す

日本紀曰 億計天皇、仁賢 諱大脚字島郎 弘計天皇
溫ー慈 同母兄也 幼聰 頴才敏多識然而仁ー惠謙ー恕
月 葬ニ埴生坂本ノ陵ニ 年秋八月天皇崩ニ正寢 冬十一

覺峯師云ふ陵河内志ふ丹南郡黒山村ふ在と記せり黒山ふ埴生坂より
三十町許坪の方ふあり坂本と稱ふ今親しく其地ふ到る所あり陵の
東西ふ長く築く陵の称ふ相ひ似たれども又塚と云ふ今親しく所あり陵
坂本とふひかれ頃日類ふ考索すれふ果して一つの山陵を得
丹南郡野上村の西ふ山陵と云ふ
其陵を西して池潢あり其地理埴生坂本と云ふ日本紀延喜式天皇の
中村の舊内ふあり
文ふ云へる仁賢帝ふ億計天皇也
ナ[illegible]ボケるおけの誤ふ
青龍山野中寺德蓮院 聖々上村ふあり
真言律宗

本尊藥師佛 聖德太子の作佛長武尺七寸又釈迦如来長武尺入寸
慈覺大師の作ふ方丈ふ安置
觀音堂 本尊正觀音 聖德太子作佛長四尺五寸
惟喬親王の作ふ侯佛
地藏堂 本尊地藏菩薩 作佛長三尺
長三尺
經藏 惠心僧の作阿弥陀佛長三尺
又弥勒佛金像と安置
太子開伽井 方丈ふ
慈母追福の為ふ

楊枝井 楊枝ふ掘ふ井ふ
鐘寺 八幡宮を
瑪瑙三石 一つの高山方丈の庫ふあり一つの本堂の右ふ
々野村の池中ふあり昔盜伐ふ捨しふ
伽藍古礎 焼瓦ふ多し
夫當寺ふ厩戸皇子の開基ふ四十六院の中ふ禪我大臣の第創ふ
往昔ふ七堂伽藍の靈場ふ中頃の兵火ふ燒滅し荒廢して久し
礎のみ残る 寛文の比阿闍梨ふ覺英の本願ふ慈忍惠猛和上
中興して戒律の道場ふ成る今律宗一流の本山輪番所ふ慈忍
律師ふ秦氏ふ[illegible]ふ園讃良郡の村の人ふ別院ふ宝泉寺也
再興して禪宗黄檗山ふ
古刹ふ近年
埴土坂 野々上の西ふ履中天皇いまして雅波の方を顧望し給へ
古事記曰 ふ埴土坂ふ
古事記ふ
波邇布邪迦。和賀多知美禮婆。迦藝漏肥能。毛
由流伊弊牟良都麻賀伊弊能阿多利
野中神祠 野々上村ふあり今亀池耕財天也祠
十七年八月授ニ従五位下ノ云云 三代實録云 貞觀

羽曳山又羽曳野と云山城御所山城より流れ出る石川沿の郡の中ふ平尾丘丹比の丘
郡あり連亘して高野山
埴生阪みかの
山中ふあり

幸國神社延喜式ふ志紀郡ふ載る所今幸日と称し社のわに彩雲の
池なり三代實録云貞觀九年二月預二官社一

大津神社三座欽定延喜式出丹下の宮村ふあり
今大宮と称し山の生土神と

標本神社欽定延喜式出真福寺村ふあり今八幡と称し山地の生土神と
社頭の傍を標本と云又真福寺と云寺あり

丹比野郡々丹南丹北の
郡を云

古事紀曰多遲比怒遲泥牟畫斯理勢婆多都基母
基母知豆許麻志母能。泥年登斯理勢婆

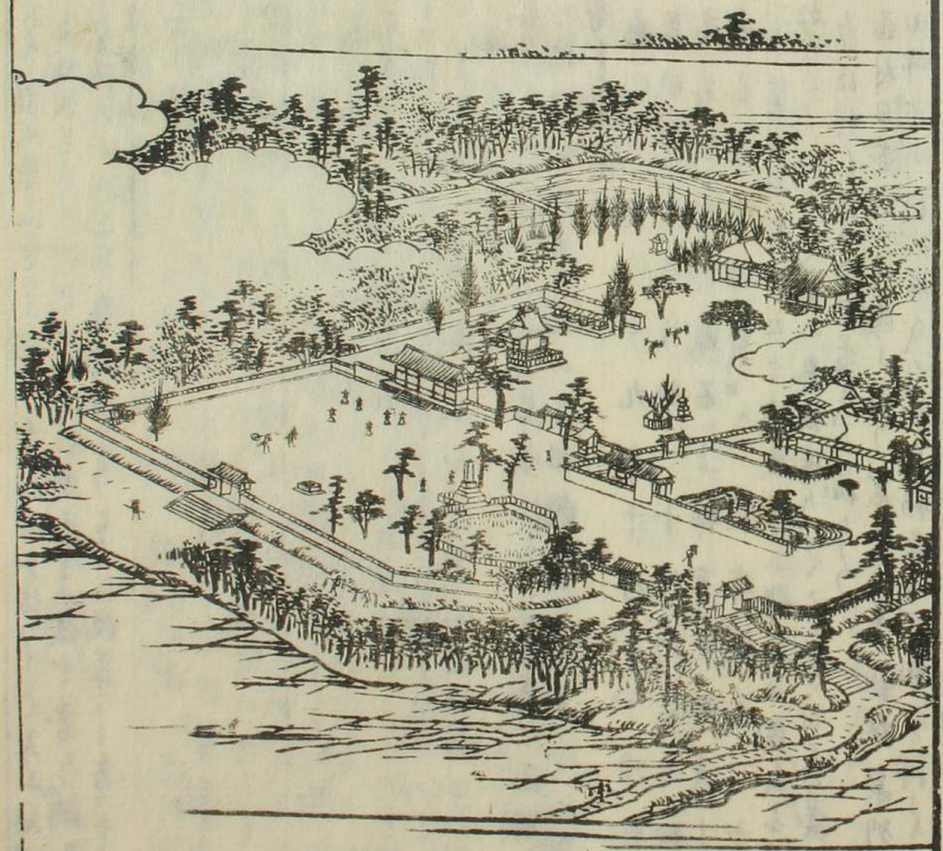
丹比神社欽定延喜式出丹治比村の西ふあり今松天神と称し
山所の生土神と例祭八月北日文德實録曰兼和十四年
十二月授二從五位下一嘉祥三年十月授二從五位上一又
三代實録云貞觀元年七月遣二使於諸社一奉二神寶幣帛一
丹埴真人縄壬
為二丹埴杜使一

菅生神社延喜式曰大月次新嘗三代實録云貞觀元年九月
授二從五位上一菅生村ふあり祭神天穗日命なり
今天滋天神と称し土人敬神隆延の地とする例祭
六月十五日狀祭八月十一日火燒十一月十五日近郷八ヶ村
本居神と云宮寺弘金剛院
号して去言傳伝云を守ふ

菅生天神

菅神誕生の所
菅丸住社の地
拾芥抄ふ見えり

菅神誕生の所
菅神誕生の碑を建
しかる不審なる事なり
菅神誕生の所
京師高辻西洞院
菅丸住社の地
拾芥抄ふ見えり



荒陵 黒山村の北にあり字を墓山といふ周百五十間池を繞らして其中に小祠あり
廣くして深し幅五六斗河内志に仁賢天皇の陵とす書紀に謂ふ所の
一説に天武天皇陵大和高市郡檜隈にありてここに改葬しまうせしより
倶に分明ならず後勘を俟つべし

河内鍋古跡 大保村にありむかし此所に多く鑵釜を鋳る者あり
庭訓往来にも見えたり今も絶えず其製造の祖は
鍋子丸といへる祠を建てて村中にあり村甲奥氏の祖にして此
守とも或る鍋師丸神と称し又鍋社と号して神代に石凝
姥命鏡を造りて天津児屋根命又天照大神の御代人民穴居して
さきに五穀を入れ又其上にも茅葺をなして火を焚く
飯を炊く鍋釜は檜田に作り竈も作りて
此鍋は幸神として荒神と書く是も竈の神なり
鍋も土鍋なりて後世の事なり

日高臺古蹟 日置莊丹南村にあり一名日置臺ともいふ此邊の莊頭日置
氏の抱所にて天正の乱に古跡顛覆して今田圃の中に
あり字を日高といふ
日本紀曰垂仁天皇三十九年十月五十瓊敷命
居於茅渟菟砥川上宮作劔一千口因名其劔謂
川上部亦名曰裸伴蔵石上神宮也命五十瓊
敷命俾主石上之神寶云云又或傳云一千口
の劔を共に十箇の品部を五十瓊敷命に賜ふ日置氏は其十
箇の一人なりて丹南に方丈餘の臺を造りてこれを日置臺とし
称し累世ここに住む今の日置氏の祖なり

夢徳稲荷祠 丹南村日置氏の後園にあり寛文八年親族泉州池
田郷万町村伏屋氏の家に稲荷の瑞夢を蒙りて

祀る由へ小名として又此門前に日祀祠あり今三十番神と称す
傍に觀音堂あり

油淵 丹南村の东の方にあり長サ十二間幅貳間日置氏抱所なり
むかし池に光ありて玉の池に湧出たり
今も時々水面に光氣あり此辺(?)權徳寺靈泉の徳なりと
見えたり又年々かならず出せり

大野淵跡 高野村の西にあり河泉両国の界にして堺津より狭山
峠へかよふ高野山の街道なりむかし摂氏の軍士にて関所をなし
関薬屋新田をいふ元禄年中田圃開發して今

狭山神社 延喜式曰大月次新嘗三代實録曰貞観元年正月授
従五位上 狭山半田の間にあり今牛頭天王と称し
池尻等の産居神なり
祭礼八月廿六日 半田新町池尻

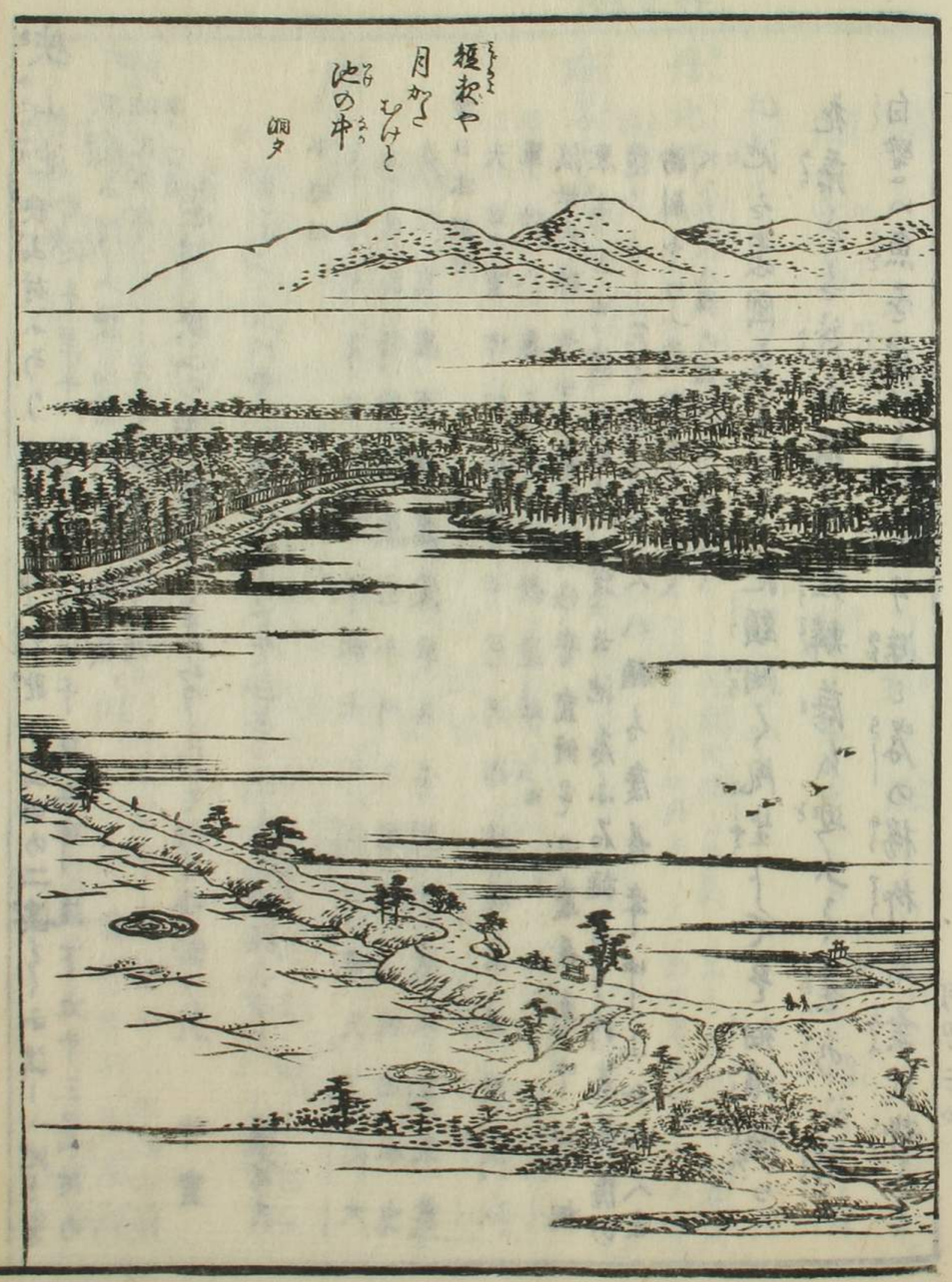
狭山堤神社 延喜式曰大月次新嘗三代實録曰貞観元年正月
授従五位上 狭山池の東明神山にあり狭山口中の
産居神なり例祭四月十五日
秋祭八月十五日

名產蓴菜 狭山池より生ず
美味なり

蓴菜やみをきつみてまてく水の色　正秀

東餘下川 水源狭山池より流れて東野菅生河原城若を経て丹門
村に至りて丹北郡に入る一名東渠といふ
西餘下川 水源狭山池より流れて北田鉢部を経て以上の郡界と
なりて今井村を過ぎて丹北郡に入る一名西渠といふ

狭山池
くもゐる
赤いらたかり
ゐろかくん
狭山の
池れ
水の
ちくろへ
市房


狭松や
月かさ
むけと
池の中
湖夕

狭山池　狭山村にあり　郡郷　天武　小山田の二郷にまたがる　周廻　三里半　廻サ十五万三千　指五坪　流下五十三箇村の田園ニ潤ス　狭山村新田の郷民　此池公事ニ　組頭を勤ム　堰門百首　泉源を狭山の池に結ぶなる　六帖

みなもとてふちのいけのそこのみそぎ　仲實

日本紀曰

崇神天皇六十二年秋七月詔曰農天下之大本也民特所以生也今河内國狭山埴田水少是以其國百姓惑農事其多開池溝以寛民業

續日本紀曰

天平寶字六年夏四月河内國狭山池堤決以単功八萬三千人修造畢　云云

後世永禄年中安見天作守重修之又慶長年中片桐東市正修補　或云池底ニ石樋あり行基菩薩の造る　元和年中小和田久左衛尉　天下尺八樋の始　慶長年中　尺八樋を慶長年中小和田久左衛尉始りしなり

池を囲繞ふ　池頭潤く風生して垂細浪漲つ

花落ちて筏を流し　紅鱗藻に遊ぶ

白鷺い魚を窺ふ　池亀手深の岸の楊柳葉に掛ふ

河内八十四

深しを秋の月は二千里乃彩を添しく映々うむ

漢の武帝元狩三年ふ堰し光ひ石鯨を作りく

昆明池ふを比せむや

丹北郡　丹北ハ丹北の訛ル　又丹南ニ作ル　東ハ志紀郡の界ニ限リ西ハ摂州住吉郡の界を限リ南ハ丹南八上三郡の界ニ限リ北ハ河内郡及摂州住吉郡の界ニ限る

雄略天皇陵　鳥塚村ふあり　丹比高鷲原陵と号ス字九山陵ふあり　周廻百餘間

帝陵記曰　陵所今河内國丹比郡鳥塚村ふあり　丹比高鷲原ニ幼れん

日本紀曰　大泊瀬幼武天皇ハ号ス　冠恭帝第五皇子なり

仁德帝七十五年ふ誕生し　其時宮中に神光あり　生長倭健他ふ超ル

崩ス治世廿三年

忠臣隼人墓　日村帝陵の北ふあり　墓表ニ云ハ　荒塚多し

日本紀云　清寧帝元年十月　雄略天皇を高鷲原に葬る日ハ　隼人陵の側ふ畫眉鳥　哀鳴て食ニ

興ニ臨ニ　七日あり　前司墓ニ陵の北ふ造る

禮を尽ハ

葬ふ少し云云

阿保親王故蹟　今東阿保西阿保　阿保菓屋と云ハ　村あり　此地ふ殿

舍あり　其讃詳なり　墳ハ　墓ニ　郡

打出村の上方ふあり　阿保親王い　平城天皇の皇子なり

行平業平の父なり

親王池 河保村ニあり親王の殿舍ありしの一結界の池と云伝
むかし嬰兒育くみしあるいは其冥福祈ゆを又母これ悲傷
池中に立る五間の塔婆を建て其年のごく建る所
なれば里人憐んで年を歴て塔婆朽
來目皇子墳 河内志に丹北郡大塚村にあり来目皇子の陵
天皇の御子にして聖德太子の弟なり 用明

日本紀云
推古天皇十一年春二月癸酉朔丙子来目皇
子薨於筑紫仍驛使以奏上爰天皇聞之大驚
則召皇太子蘇我大臣謂之曰征新羅大將軍
来目皇子薨之其臨大事而不遂矣甚悲乎仍
殯于周防国埴生山岡上
賞峰師云此皇子の墳は河内志に丹北郡大塚村に在れども埴生山の
岡上にいまは是埴生山と云へる今羽曳山なり此脇に
ふくるる所上なるを上ふくるる所を東ふくるる所を
阪形ふくるる此所に二の古墳あり
ふくるる正南にあたり墳口あり上の蓋石あり
先の方に石室刻りて其の方に作りて其三枚の石あり其三枚を
再び刻りて其刻しは大ふ常なる
ふくる刻津を止るふくるる墳の広さ六尺ばかり内へ入る事弐間半ばかり
にして一階なるさし左右上下とも廣く横は紙て幸丈ばかり
立六尺ばかり其ひろさ二尺ばかり廣ふ深さ石ぬ
むかし石槨を築き廣ふ形ふくる今い石槨かし左右の石長しく廣

うめ一此墳おそらくは来目皇子の形ふくる埴生山岡上なり
日本紀の文ふ叶ふ云云
土人此墳を門保親王の墓と云ふ按ふ一津屋村に荒塚あり
門保親王の墓ふこれ親王の墳形ふくる
上方武所許ふあり橋津名所圖會ふ荒塚村
殿舍の地所頃の地なり
の陵を七所ふ

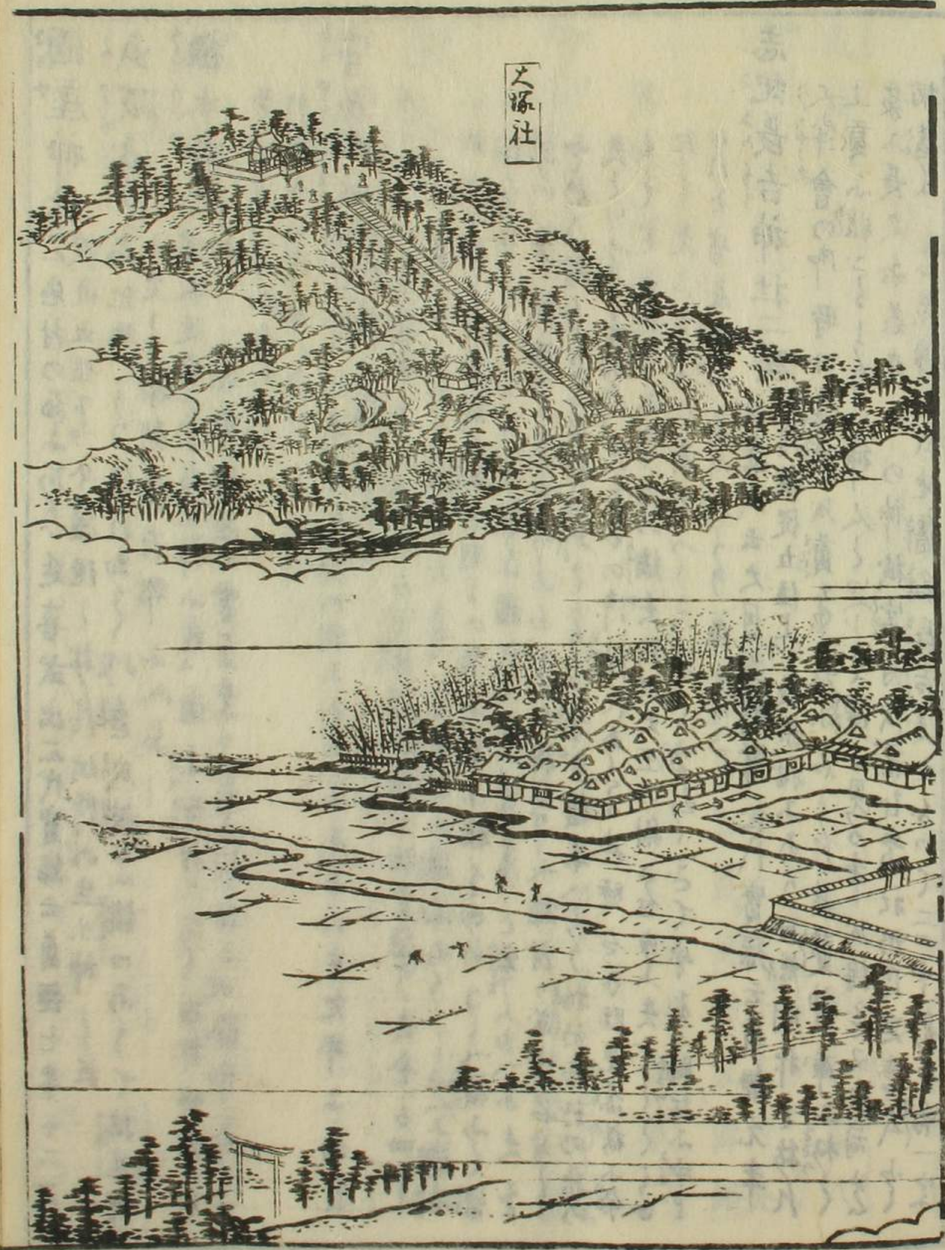
あり

天滿宮 此塚の上ふあり寛文王子の事此塚を大塚村名の生土
神ふ祭る六月廿八日
柴離宮 松原村上田廣庭神祠の東北をいふ都
六年今村燒詳

日本紀云
瑞齒別天皇反去來穗別天
來穗別天皇二年立為皇太子
于淡路宮生而齒如一骨容姿美麗於是有井中
曰瑞井則汲之洗太子時多遲花落有于井中
因為太子名也多遲花者今虎杖花也故稱謂
多遲比瑞齒別天皇中
内丹比是謂柴離宮當是時風雨順五穀成熟
人民富饒天下太平是年也太歲丙午六年春
正月甲申朔丙午天皇崩于正寢

廣庭神祠 松原莊植田村にあり今天滿宮に移る
神一之例案六月十日宮寺此廣場山觀念寺
田坐神社 田井城村にあり延喜式出又三代實録云貞觀四年四月
授從五位下五月列官社今八幡と移る

笠縫宮旧跡
蒙霧く
其いろ〳〵の
色ひ
天満宮
紀考


大原社

酒屋神社 三島村の西ふかう延喜式出三代實録云貞観七年十二月授従五位下今權現と称す此所の生土神なり此所に鎮座す波口あり

瓜破波口 志紀郡ふへる流れ出る水を瓜破波口あり

樟本神社 鎌倉延喜式ふ志紀郡ふ載す南本村ふ布都明神也称して物部守屋の霊を祭るとも日村ふ日羅寺あり

本尊薬師如来

聖徳太子作

守屋城址 南本村北本村西村の間ふあり小本村志紀郡ふ属に

猪村城と雖も

太子傳云守屋の城也中に東ふ高百濱川西南ふ堀を穿り矢倉を四十八ヶ所に有りと雖城中に高サ十餘丈の櫓木あり櫓ふ櫓木城也一説義城の砌熱廻の櫓ふ猪を無しと雖太子の櫓ふ猪を掛けすべ櫓みも櫓猪を無しと雖太子の櫓ふ猪を掛けすべ猪村城也名付敵に車成陣ぶき也三日申の刻に敵に取られふ守屋榎本へ上り物部布施の作の矢を以て射太子の作地にあり其時太子跡見赤檮ふ命じて定恵の弓ふ六ッ目の櫓矢を以四天王の射させ矢を以て射たし先と射た其矢遠く飛ぶ太子落ふ守屋を逆ふ木の上より落ふる

志紀長吉神社二座 延喜式云大月並新嘗三代實録云貞観元年天掌會の所時日蔭明神と称す上貢ふ班ぎるとの神人と夢神庫ふ祀る家ふ長久永義年中の神祇官祈禱む者社那内延喜式也相遠く長吉後也分って二ッ也形も名一字

古老傳云此地舊名長吉後也

弘法大師

志紀ふ屬し泉川ふ入る郡

瓜破 東瓜破西瓜破二村あり土人云むり名と称し又六月祭日と雖

中臣須牟地神社 任道村ふあり今住吉と称す延喜式ふ称列

日本紀云 雄略天皇十四年正月呉國使泊於住吉津是月為呉客道通磯歯津路

名呉坂

萬葉集曰住吉爾住道爾昨日見之恋思貌事二

四有家里

阿麻美許曾神社 鎌倉延喜式出南拓本村の南の方天思五あり土人云

本居神祇むり此地ふ行基大士

住吉神王東ふ妻日西ふ伽藍七ヶ所の

布忍荘 堀村白井村高木村清水村更池村東代村等六ヶ村

土人布瀬と云む此地ふ伽藍あり

古佛更池村の多門院ふ毘沙門天向井村ふ布忍山永興寺あり

本尊十一面観世音ふ行基の作長四尺八寸八分高木村ふ布忍山東ふ坊

ありて本尊十一面観世音の金銅佛

ふく唐作長九寸許

布忍川 水源牧山池ふ流れ西鉄下川と丹南八上の郡界を経て

東代更池東我堂西我堂を流れ末々新大和川ふ入

紀寺

夕ふ立て大ふ出れを布忍川浪ふ皺ふく幅も広れぞ 浄久

八上郡 東南ハ丹南郡ノ界ニ限リ西ハ泉州大鳥郡ノ界ニ限リ北ハ
丹北郡及ヒ播列住吉郡ノ界ニ限ル

丹比行宮 小寺村ヲ過ギテ天平神護元年十月 帝和泉國日根郡ヨリ
ココニ至リ翌日弓削行宮ニ幸シ給フ

巨勢金岡故居 金田村ニアリ むかしこの所に住ス 俗云宮中 宇多帝寛平年中遠江
金岡ハ此ニ三十二人ヲ畫キ半ハ今ニ至テ
例ヲ以テ金岡ノ規範ヲ守ル 紫宸殿賢聖障子ハ中務
金岡神祠 金田村ニアリ 一説ニ金田ハ金岡ノ誤字ナリ 系神牛頭天王
住吉山王ノ別 里諺云巨勢ノ金岡ノ墨ニ紙ヲ
又本地堂ニ茅所佛 長さ一八分 高サ四分 作聖觀音 長弐尺許 法遍
仙人 俗ニ觀音坊ニ安置ス

登蓮法師絲薄古蹟 日村ノ絲薄山光照寺ニ
絲薄ハ此ニ地ニ 登蓮法師ハ
伽藍巍々タリ 嘉暦年中ノ兵火ニ罹ル其頃本願寺第三代覺如上人ハ此地ニ百餘日逗
留シ給ヒ浄土真宗ニ帰登蓮法師ノ墓々金田ヨリ三千町斗南河内村ニアリ

杜無ニ植ニ生クルマヽ付糸薄ヲ列ヒ
登蓮法師

須牟地曽禰神社 延喜式ニ播列ニ出 南花田荒蒔村ニアリ 今勝手ノ神
家集 住吉の二路ハ分リ道ハ〜せを人ニあとをとゝめしられ 家持
名産 蓮 南花田村ニアリ 蓮ノ葉ヲ載ク茅ノ帽ヲ
松井 日村ニアリ 名ノ溫ニ夏冷ノ
其味最美ナリ 此ノ名ハ

澁川郡 東北ハ若江郡ノ界ニ西ハ播列 東生郡ノ界ニ限リ南ハ
志紀丹北ノ二郡ノ界ニ限ル

渋川神社二座 植松村ニアリ 延喜式ニ載ル 今天神ト稱ス
此所ノ本居神

龍華寺古蹟 日村ニアリ 訓ニ結ク
萬葉 橘寺の長屋ニ我ゐれ 妻なれあらい妹あげつゝん 渡人考ヘ
續日本紀云 神護景雲三年 天皇由義宮ニ行幸シ 假ニ肆 廬 紙
龍華寺ハ西の川上ニ建ル 上ニ建ル 河内の市人を勅願免ス 長ヒ
考 從五位已上 私の願ハ 車駕ニ
除ンヌ 遊 遊 ノ云
此古蹟ヲ今市場ヨリ又ハ 川 能美堤 能美池 能美橋 能美
土人橋ハ此ヲ 橋 能美ノ郡東弓削ノ内
萬葉 ちはやふる神の御代にはあれど我下衣 渡人考ヘ

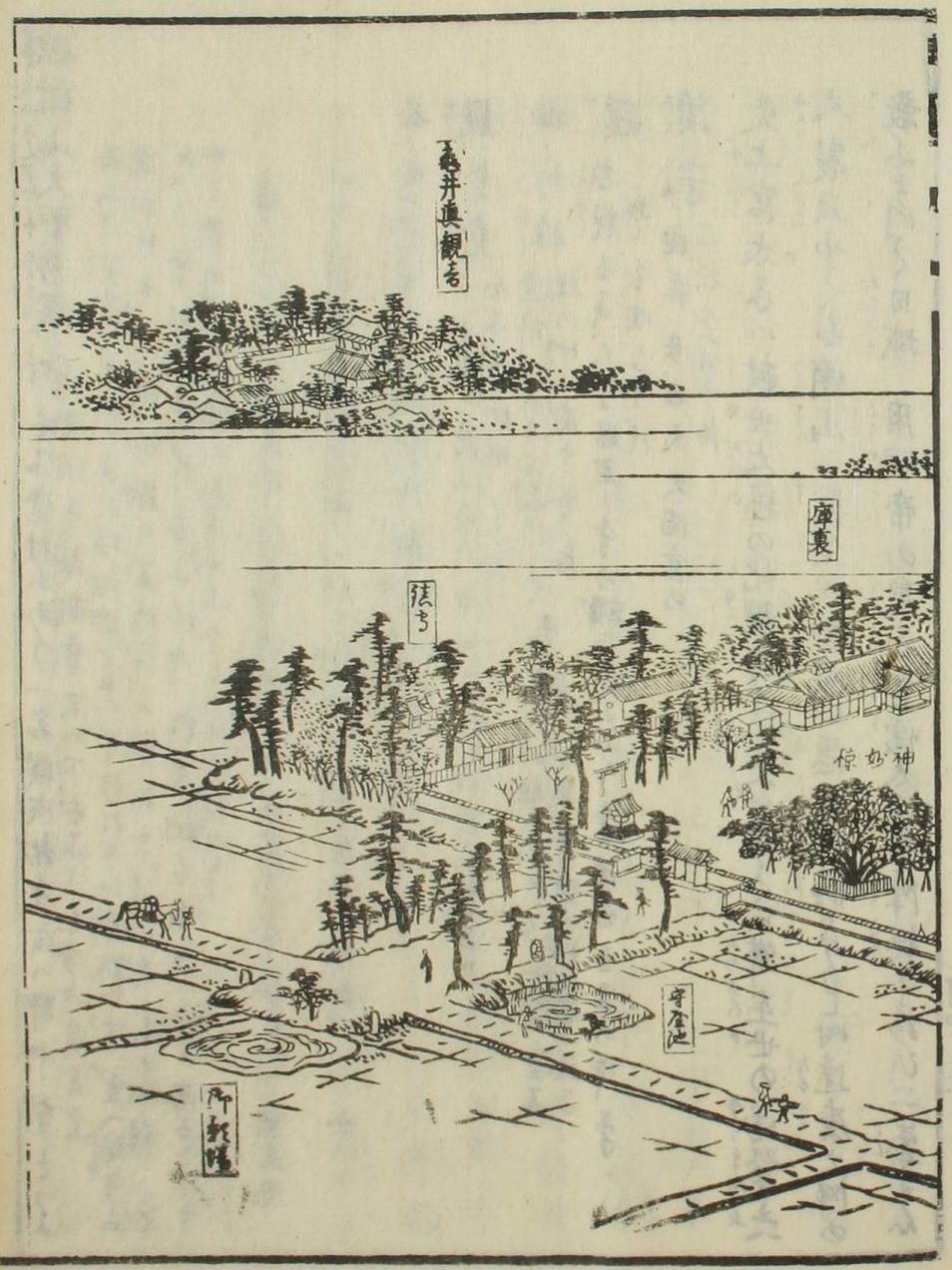
跡部神社 亀井の屬村 跡部ニアリ 延喜式出
此所の本居神ト

眞觀寺 亀井村ニアリ 禪宗京師南禪寺ニ帰ス
万松山眞觀叢林寺ト號ス 恵心僧都の作長三尺 南寺ハ永享年中庭瑞
本尊十一面觀音 畠山滿家の建立ナリ 法號ハ眞觀院殿三品
尾州大守道端大居士 畠山滿家墳南寺ニ
永享五年九月十九日卒ス

亀井 今河内ノ亀井村ニアリ 亀井ハ今河内ノ山ニアリ

下太子
將軍寺
神妙様

ひくの実や
つるん坊を
ふるへる
辰花 八十四翁 魚丈



椋樹山大聖勝軍寺　法隆堂村ニあり一名額成祝寺或い野中郡と里俗ニ椋樹寺又い下ものゝ眞言宗

右大臣実隆公天文の末ハ頃紀巴と先しハれのひ右野の高聖へ御の通の紀云　神妙椋の本の河ハ寺ハまつり彼本尊科を

ひゞ案内ちかゝる人云そうふゆてひゝれろう

稱名院

ゑてとくまろりけんむ乃本のひゝはゝれまて申ハ而ハ

いゝ〳〵の沼も本姿ハ中ハめて駒引むゝ寺ハ書ハ

本尊聖徳太子植髮沛影沛自作十六寸の尊ハ　仝

観音堂　なる者の左ハあり本尊如意輪観音長三尺

神妙椋　堂前ハあり古木にして馬蹄石椋の本下ハあり左ハ

株の中虚ハ　馬の蹄の跡石面ハ張る

額　植髮なる大聖勝軍寺の額二ヶ所ハあり寺伝ハ左ハの沛寺

しるし分明ハ

須寺　稚若の毋財天天満宮の

三社を祭る

史上宮太子い救世大悲の化現ハして天竺ハくい佛在世の勝鬘夫人

人宸旦ハくハ衡山ハ數生紙經ハ恵思禪師ハ達磨大師の

教ハくハ日域　用明帝の皇子聖徳太子ハ降誕ハ給ひ二寺ハ

沛時初言ハ南無佛ハ稱ハ給ひ給惡莫作衆善弘行の教ハ

繼ハ給ひ沛父帝登極の後ハ左子の奏ハ　天皇尊く三宝ハ

貴敬ハ給ハ迎居物部弓削大連宇屋田抑我国ハ天日嗣ハ

皇孫神代ハ傳ハて天竺宸旦ハも敬ハ給ひ玄妙ハ給ひ神国ハ

人代ハ連んでも神武帝ハ都ハ一千三百餘年異邦の佛法未

佛ハ給ハ中ハ天下清平ハて祝賀ハ今西蛮ハん佛法ハ

尊ハ堂塔伽藍ハ建ハ貢税の地ハ費ハ佛像ハ財寶ハ散ハ

ハ年国家の災害遠ハ中ハ海ハ隔ハ佛閣

佛像ハ焼拂ひ尚国治川那呵都の宅ハ引退き猫村城ハ築き

数十万の軍勢ハ従ハ神ハ義滅ハる其時左子十六歳ハ

甲冑ハ着ハ軍ハ官軍ハ引率ハて敵城ハ向ハ干戈ハ形ハ軍車

ハ拵ハ給ハ左子ハ勢ハ隊伍破ハ兵士逃趨る敵

兵戦ひ逐ハ年既ハ老急ハ聖術ハ盡ハ万死一生ハ

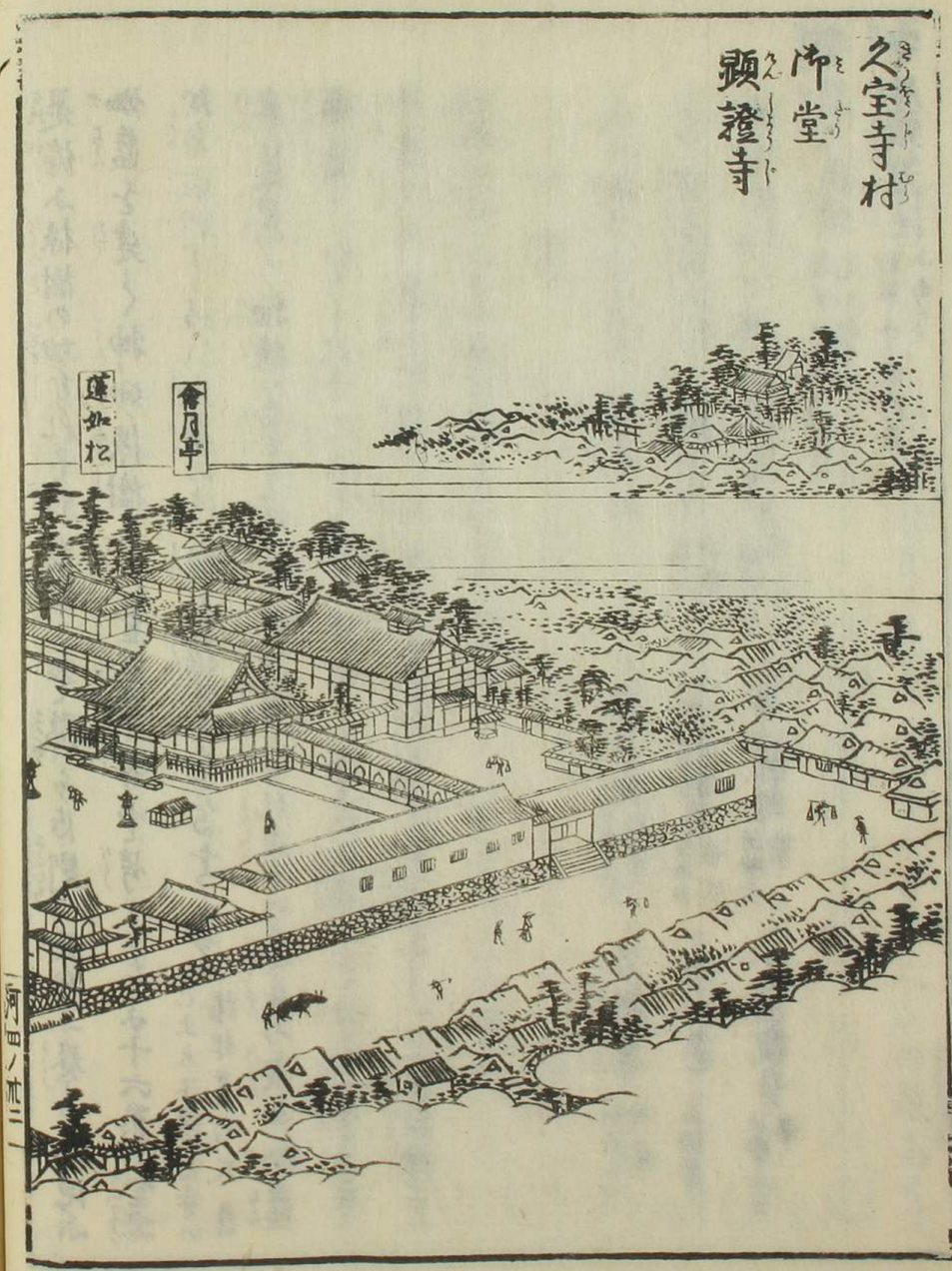
をる遍れんゝ〜をゝ地をゝ〜ふひゝ〜ふゝ大木の樟あり
其木隨ふ立寄給ひ嘆じ曰我ふ救世の本願あり給ふ今逆
臣守屋ら爲ふ侵されんゝ類い武意難ふ拔ゝ〜ゝ宮ゝ
不可思議ある武ゝ樹多ふ樣の中用製ををる大ふ喜び御身を武中
に隠〜ゝふ其樣封固をる事のゝ〜敵軍馳来て尋求ふ已た
駭〜〜空退く後樟樹又敎開〜てをる再び生をゝ〜ひく安据ゝ昂
ゝ樹ふ向ひ歡喜踊躍〜て偈を誦〜て曰神妙樟樹悲母木。我身出
生廣大恩。紹隆佛法今成就。日日影向不退轉。唱へ則秦川勝と呂て
白膠木ゝ〜をゝく四天王の像を彫刻〜て四呂 蘇我大臣 逆見赤檮 妹子大臣 秦川勝 の願欵
ふ叡免我を〜て敵ふ勝〜め給ひ讓世四天王寺ゝ〜建んと志願ゝ
起さを赤敵城ふ向ひ〜ゝ〜ゝ〜ふ逆見赤檮ふ命ゝて矢を射ゝ
給ふ其矢守屋が胸板ふ中ゝ〜ゝ〜ゝ樗より真逆ふ落ぬ秦川勝
走ゝ〜ゝく頸ゝ斬倩の泡水ふ洗ひ凱歌を上ゝく陣を退たゝ

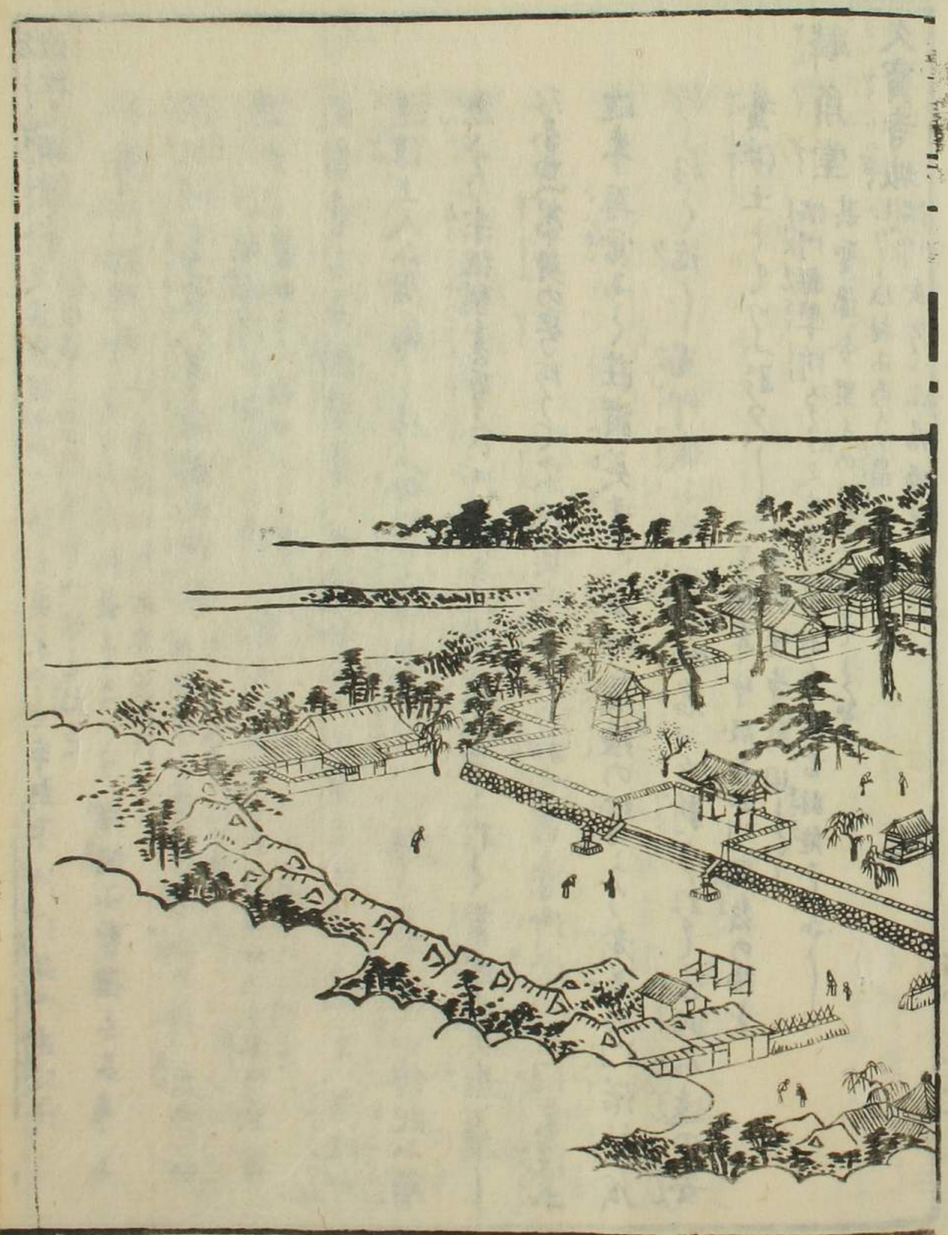
是偏ふ樟樹の功なれを戰勝ふ我ゝ歸ら所則 天皇ふ奏ゝ武ゝ地ふ
伽藍を建ゝく神妙樟樹山大聖勝軍寺ゝ号〜をる十六菜の聖容
ゝ自彫刻〜給ひ生身の御髮を植ゝ本尊ゝ〜ふ 已上太子傳當寺の緣起等の大意
年紫累ゝ物換ゝ星ゝ移ゝて中頃畠山ゝ乳迫ゝ慶長の戰ふ伽藍
頽廢〜〜むゝ〜れ十ゝ〜ふも及び給れども在ゝの正蹟ふゝく世ふ上をゝ
御廟所御墓山ゝを称〜下太子寺屋退治の戰場ふ〜て三寶弘隆ゝ
始佛敬降伏の四條浮圖を信ゝ所貴賤ゝふ消ぜ所ゝ事ゝ

什寶

○太子御自作四天王　○佛舍利　○大般若經 光明皇后御筆　○不動尊 弘法大師御筆
○三千佛名經 太子御筆　○藥師佛 惠心御筆　○如意輪觀音 百濟國傳来　○經一卷 右同筆
○持國天 秦川勝作　○毘沙門天 蘇我大臣作　○當山緣起 解脫大筆　○十一面觀音 巨勢金岡筆

守屋大連墳 勝軍寺南門前の左ふあり
守屋頸濯池 勝軍寺南門西ふあり


久宝寺村
仏堂
願禮寺
會月亭
蓮如松



迦松山願證寺 久宝寺村ふあり浄土真宗本願寺御門跡御連枝代く任位職しまふ久宝寺坊と称ス

本尊阿弥陀佛 主日佛作他長さ尺八寸 脇間ふ聖徳太子ふ

宗祖親鸞聖人等身真向御影 蓮如上人真筆 真向の御影の初天下第一也と称ス

蓮如松 對面所の庭中ふあり 蓮如上人植ゆ給ふ松

合月亭 本願寺良如上人好の茶亭

文當寺々本願寺第八代蓮如上人の建立ふして息第八男法印

蓮淳上人ふ附属しまふ毎ふ石山寺観世音の化現なる事 蓮如傳記ふ顕然ふり宗祖親鸞聖人の御影を大津近松寺ふ移ス骨肉の真影を摸しなるふ四人等身の号ふして宗派真向号の初め当寺御堂四足門書院ふ

迎来再宮ふく荘厳美麗く毎時晨鐘の響ふり老若の門徒神仏ふ

信ふ敬ふ信ふ渇仰職ふ佛恩の稱名日々新なれど去此不遠の安養浄土ともふ形るべし

元弘年中故大和川開発の地を今新池寺新田ふり

麟角堂 泉川縣学所ふり久宝寺村ふあり其古蹟絶ふ

其聖像今里人の家ふ保ふ

久寶寺城 泉川郡ふ村ふあり畠山の麾下

許麻神社 久宝寺村ふあり延喜式出今牛頭天皇と称ス式所の生土神

式地を許麻荘ふり社ふ弁財天天満宮ふある本地佛の茅所堂あり

題して曰 泉川郡許麻荘神武明星澤古哥云

許麻の里波名ふ高ふ杜若君ふ多ふ

神武ふ堀の名ふ明星澤ふ村の西北ふあり 樊ふ花ふ生ス前夏盛開の時花美麗

観音院 社の傍ふあり許麻神社の宮寺ふ真言宗大悲閣ふり

これ久寶寺の古跡ふ

本尊十一面観音 久寶寺観音院ふ安ス聖徳太子御作立像長尺八寸ふ

建立ふり慶長の兵乱ふ堂舎焼亡ふ本尊ふ安ス伽藍魏々ふして則太子の

伊賀国ふあり国人の多ふ河内国久宝寺ふ育縁の霊場ふ

述ふ所の地ふ優ふ

の地ふ

伊賀々川 水源明星澤ふり流ふ安遥ふ乾村伊賀々村ふ至足代ふ流て

揺列平野川ふ入

伊賀くふ色の村名ふ伊賀々を敷家名所和哥集秋の夜嘆ふ

河内国ふ出せり伊賀々郷ふ

順の和名抄ふ伊賀々郷ふ

ふ出されふ

ふ

龍眼泉 乾村ふあり清徹甘味ふして

亢旱ふ涸ス

横野神社 大池村ふあり延喜式出今印色宮ゝ移れ

横野堤 横野堤一云むらの海 横野堤 十二年十月築横野堤 日本紀曰 仁徳天皇 此所の生土神と社頭の池形ゝ今けごう形ゝ此所ゝ海 濠渠及び井水 形ゝ人ゝ此郷内他境ふ勝れ地形低ゝ 濠渠及び井水 も亦鹹鹵ゆゑ田畑海の近き證形ゝ

續古今 霜のれの横野堤風さえくへほとゝ千鳥なくし 後京光後

都留彌神社 足代村ふあり延喜式出今天神と称ぶ此地の生土神と 南村の名産 藍笠 世ふ名高ゝ 藤草ふ名高ゝ 藤草ふ名高ゝ 西ゝ振列東生郡の男を限り 北ゝ茨田郡の男を限り

若江郡 東ゝ高安河内二郡の男ふ限り 南ゝ志紀泉川二郡の男を限り

弓削行宮 東弓削村をゝ 續日本紀曰天平神護元年冬十月 弓削行宮ふ到ゝ 雑を授ゝく文武百官みか 詔ゝく道鏡ふ大政大臣禪師の てれ代ゝ賀せゝむとえゝ

弓削神社一座 延喜式曰大月次相嘗新嘗 三代實録曰貞觀元年 正月授正五位二年秋七月彌加布都神従加従二位 東弓削村ふあり 此所の本居神と

弓削河原 故大和川原弓削村の ほとり ふるゝ

万葉 真鉾持弓削河原之埋木之不可顕事等不有君 讀人不知

都家 都塚村ふあり由紀由義宮ふ見ゆ又紙園家 雜勢天家 多の荒塚 此所ふ凡そ家の数五ヶ所ふあり

都留美島神社 鎌延喜式出 都塚村都塚の上ふあり

八尾木鶯 東弓削の西ふ八尾木村金剛蓮義寺不動座 右大臣実隆公高野詣紀行云

河内國八尾木の金剛蓮華寺をゝ寺ふ住ゝてひふ乃り ゝ人ゝ此八尾とゝふ名ゝ名ゝ那一郡 ゝ此所の八尾を十二 ゝ牧ゝ此所の八尾を八つ

高松重信塚 日村ふあり土人高塚と云ふ 瘧疾を祈ふ霊塚あり

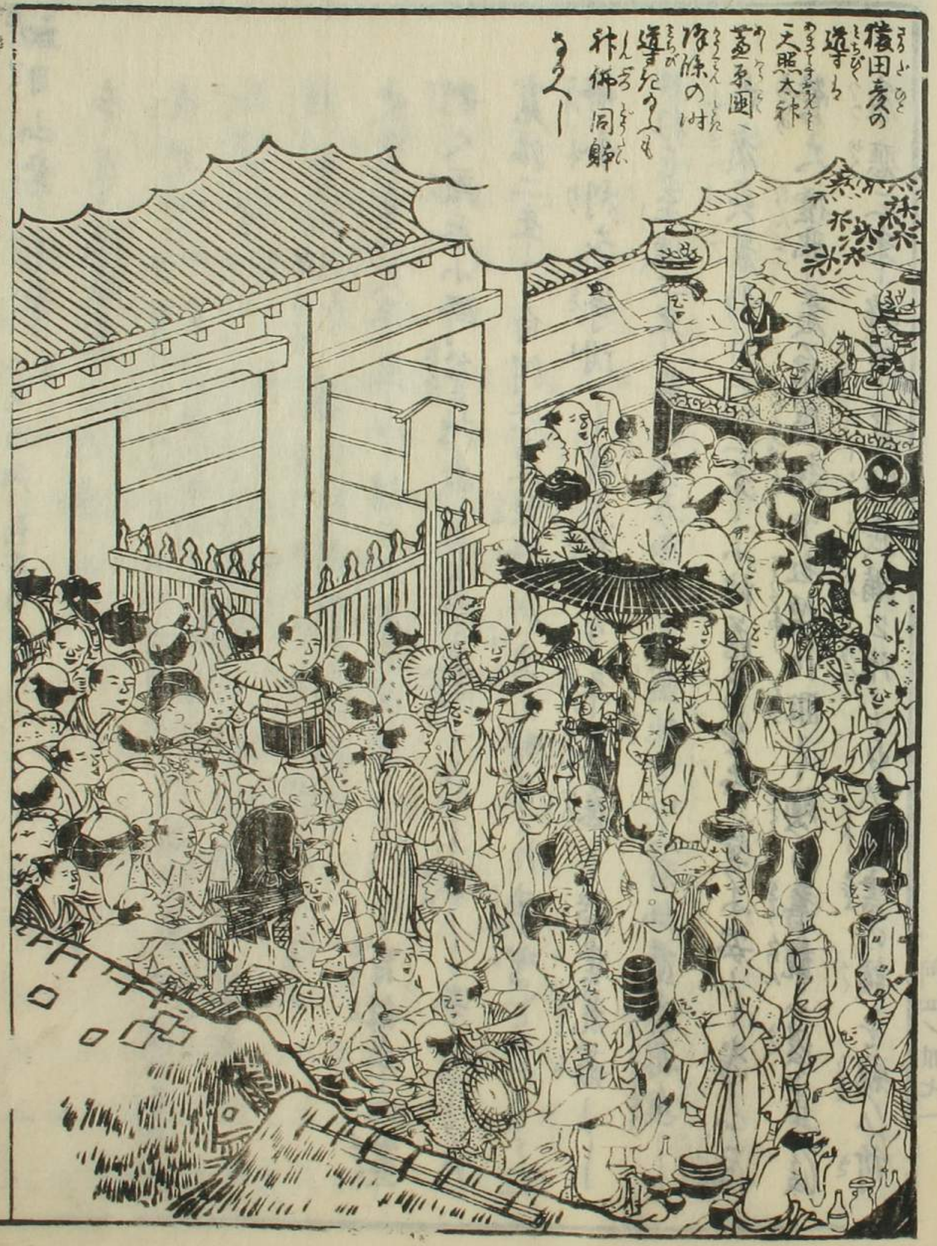
由義宮 八尾木村ふあり 十月 帝由義宮ふ行幸 續日本紀云 神護景雲三年 西京ゝ河内職を詔ゝく曰河内國弧 を賜ひ安宿志紀二郡田租の半を免除ふ又寶亀元年 七十已上の者ふ宝物 価を酬給ふ今の別宮都家弓削植松等多くい其数 正月大縣若江高安等 又曰同三月ふ葛井船津文武生等数 百姓の宅を由義宮ふ入れて其 續日本紀曰 乎止賣良爾乎止古多智蘇比布美奈良須 爾詩乃美夜古波。與呂豆與乃美夜

弓削寺址東弓削八尾本の間ふあり　天平神護元年十月
捨二食封二百戸一

長瀬川故大和川之田圃の用水ふ流れ又小船大坂へ通ふ一名いかへ弓削を経る称謂万葉集に弓削河原とうたふ志紀郡より流れ渋川郡の界ふ流れる井田より入森河内ふ至る摂州東生郡ふ入

長瀬堤長瀬川の西岸をつゝふ今ふ残る天平寶字六年六月長瀬堤決る単功二萬二千二百餘人ふ発る〻〻俗造ふ又寶亀元年秋七月志紀渋川の堤ふ修て其功費三萬餘人又貞観十二年七月朝使を遣し〻河内国の堤を築ふ〻成功い〻〻畢ぬ〻ふ重て害あり〻ふ祈て大和国三歳神大和神廣瀬神龍田の神ふ奉幣し〻雨澍亟年ふ祈て河内の水源大和国ふ出るを堰ふ〻同十七年二月右中辨橘朝臣三夏ふ〻〻河内国の堤を築し先其長官ふ〻〻命て堤と云ふ〻〻又の名龍華堤とうたふ〻〻土人ふ〻〻〻〻ふ〻〻〻〻ふ〻〻〻〻

八尾市
毎年
七月廿四日ハ
地蔵菩薩
遠近参詣
六道絵化の
菩薩なれば
地蔵尊の
御像を
猪田麦金
十九文
子安地蔵尊
河内八尾


猪田麦の
遠ずり
天照太神
宮参詣
伊勢の山
遠ずり
神仏同躰

初日山常光寺 八尾西郷邑ふあり 禅宗

本尊 地蔵尊 小野篁の作 長六尺

舎利堂 本堂の左ふあり 白河院の御願 阿弥陀堂 本堂の右ふあり 陣家附の佛舎利を安置ス 佛師の鎮守 金毘羅権現社

舎利堂 舎利壱の左ふあり 毎日佛師の 鎮守 金毘羅権現社

焔魔堂 焔王 弘安元年

鐘堂 弦身の侍ふあり 額 表門 初日山 本堂 常光寺 俱ふ

文嘉寺 天平年中僧正行基の開基ふく一千有餘年の霊

剃髪 厩戸小野篁地蔵菩薩を刻ミ安置ス 本尊ハ

寛治二年 白河法皇熊野行幸の時ハ車駕をめぐらされ

佛舎利を寄附し給ふ其より年兼歴く諸堂荒蕪

ハれた至徳二年孫原又五郎左衛盛純ハ者伽藍悉再興し

荘厳美麗ハ河三年ふ地蔵尊を本堂ふ安置ス 尚山再

営大檀那 藤原盛純ハ虹梁に眼ク頗る善観ふ復る其後

康應二年 将軍 足利義満公 自書の額を賜ひ祈

願所ふ令ぜ〜ハ慶長元和の頃ハ八尾郷江戸場ハ寺内て伽藍

も多く軍馬の歩ふ覆く殿堂の丹青室〜ハ朽光昧し

然れども地蔵菩薩の霊験いちしるく我ハ見へふ仏ハ

戰死碑 寺方丈の庭ふあり 傳云元和元年五月五日藤堂 高虎 諸士

代地ふ於く合戦し 討死の士七十一人の墓碑其文曰

元和元年乙卯。伐レ阪。我。月五日。命レ明日軍道明寺越六日。昧爽。公以歩騎五千。營千塚。曾我部盛親。増田宗盛等。率兵三萬。直向レ沙旌旗蔽レ野。公急出驍騎馳躡焉。式部及澤田平先登。兵部左近等死レ之。既而大軍並進。左拒。戰八尾所仁右衛門及氏勝親氏陣亡。右拒戰西郡萱振所新七郎及玄蕃陣亡。隊騎家従戰没各處以羈阪師公子宮内公婿守力メ闘梅原政武早戦若江男亀死。收銃卒射背敵不レ堪保久實澤田但大島作等挾撃敗レ之。渡邊勘継進。磯野平獲宗盛尾盛親到平野米女用戈于若江彦根師逐克重成越七日。與毛利勝永軍戰。内藏及妄並等陣亡。佐伯權及阪井與落合半岡本弘十往傳最勇。晩門黒門連日。所レ獲首級八百七十云 命築墳常光寺祀忠魂前年戰死與焉。是役也二師献言曰 高山公拜正先鋒五公再蒙重任。咸

命為卽。不以死奉戟。先在諸侯矣。嗟行與言符
役利祿之徒。奚知忠肝義膽。迨百五十年宗國
膺社實其力也。三室遠孫相謀建碣。君侯賜
篆額。附銀千両。于寺。永享歲祀。以銘屬高文銘
曰

趙趙武夫　同心同德　人皆股肱
倆倆執職　厥將愛君　厥士愛將
首離不僵　誠勇旦壯　以死當衝
攝軍之善謀　中原撫平　宗祀享休
攝東河西　常光之國　刻名茲石
萬世永存

寶暦十四年歲次甲申夏五

仁右衛門、七世孫　勝堂喜景
新七郎五世孫　勝堂良躬　建
玄蕃七世孫　勝堂良演
洞津
弥二兵衛六世孫　勝堂高文　撰
勘解由七世孫　勝堂氏勝　助工

忠貫日月　義凌秋霜
嗚呼勇士　今也則亡

津城ム録
傳長老牌陰偈

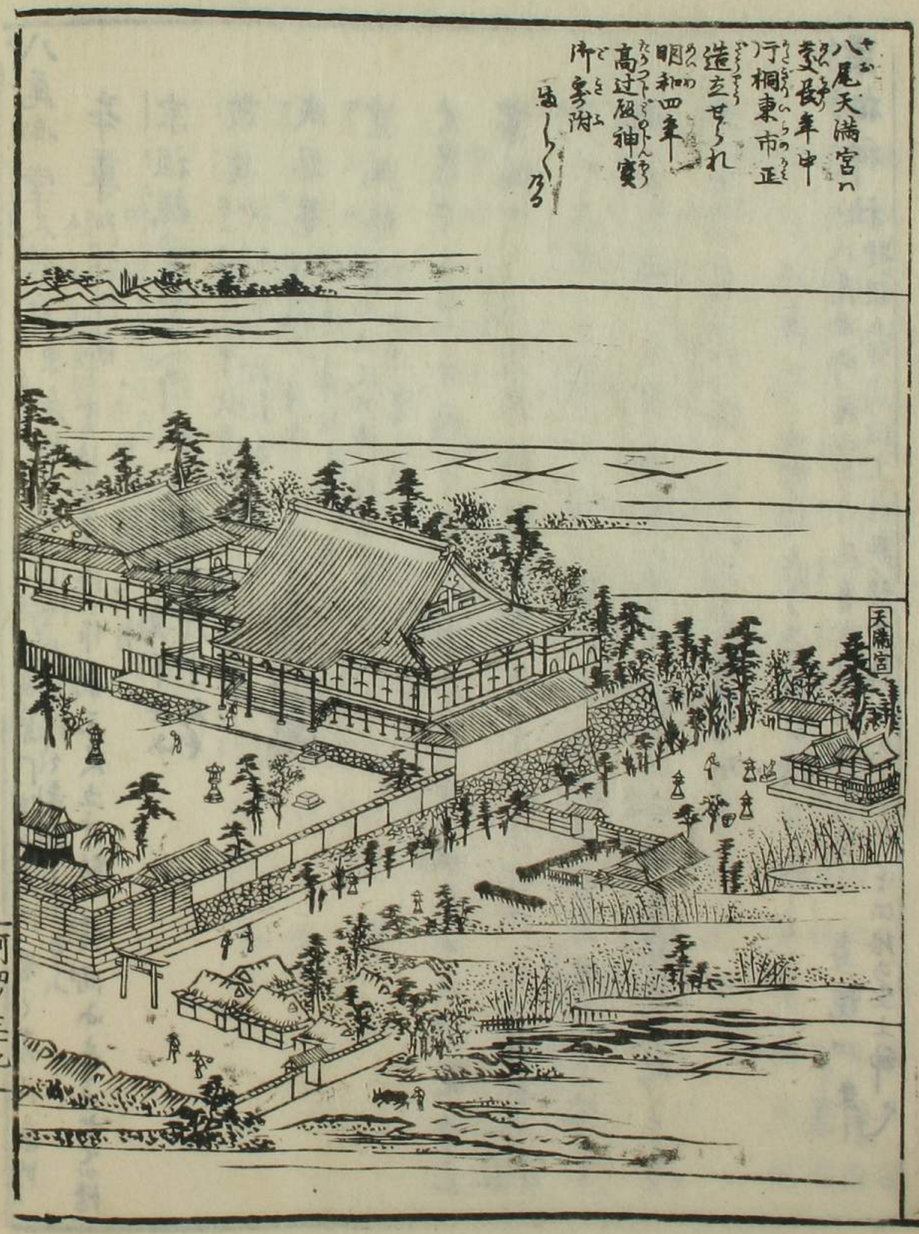
八尾御堂大信寺　八尾寺内ふあり浄土真宗門徒八尾御堂と云ふ京師東本願寺諸末寺御堂と云ふ
本尊阿弥陀佛　聖德太子御作長三尺五寸許彫刻ふとる七宝佛
宗祖親鸞聖人御影　教如上人真筆也ふ
鼓楼　長禄中伏見城より移ふ
成思菴　書院の座敷
空風燒　教如上人の御好ふ
今ふ伝来ふ

丈巻寺　東本願寺十二代教如上人慶長年中北御建立ふ
霊場なり因近年御堂再營ありて荘厳微妙ふ番列の門
下ふ清し　他力本願ふ帰入し　法性常楽の境ふ号信し
佛恩を報ぜ　国恩の報ぜ　稲麻の如し　一衆の名報恩講ふ京師より
御門主御下向の折柄八尾川ふ来ふ

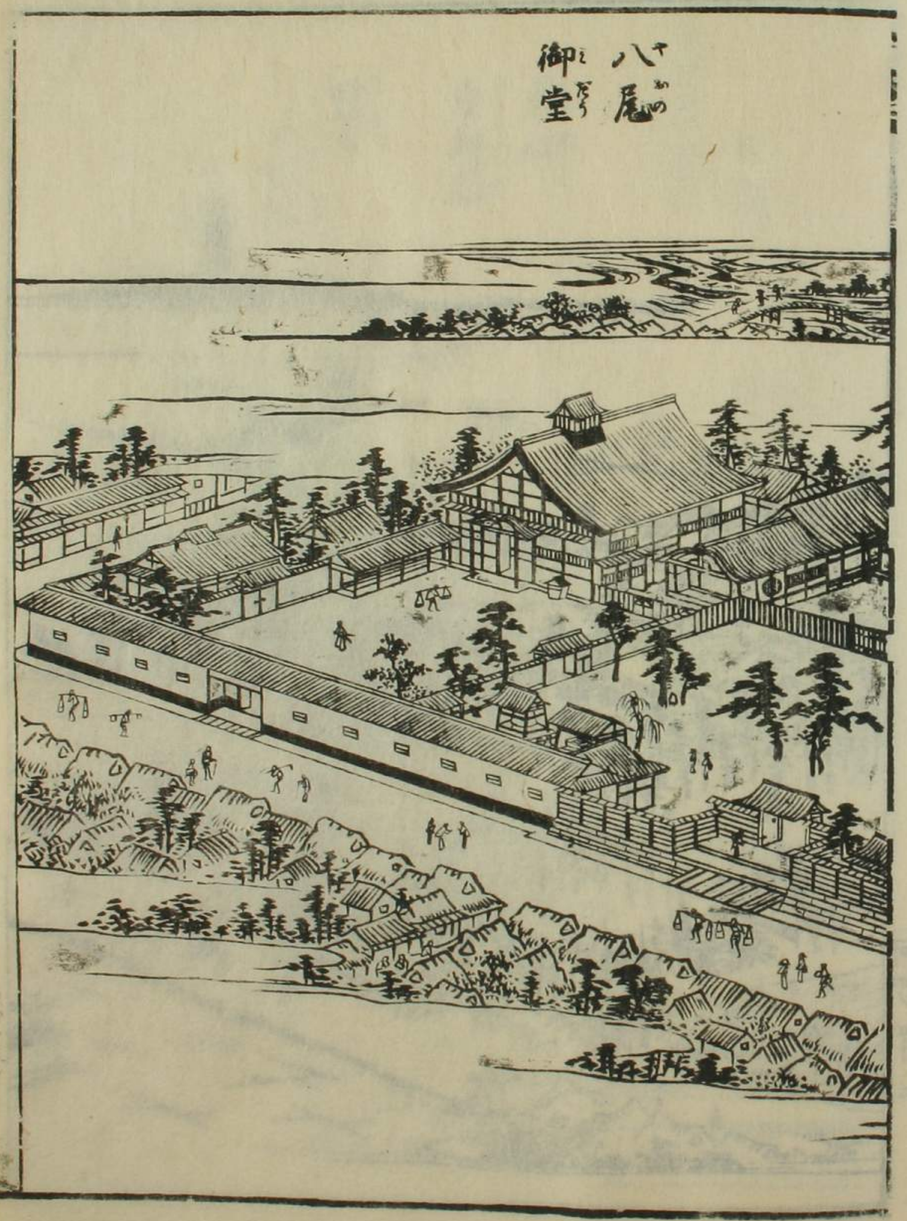
八尾川ふ　ゆけ来ふ　さゆる鼓の音

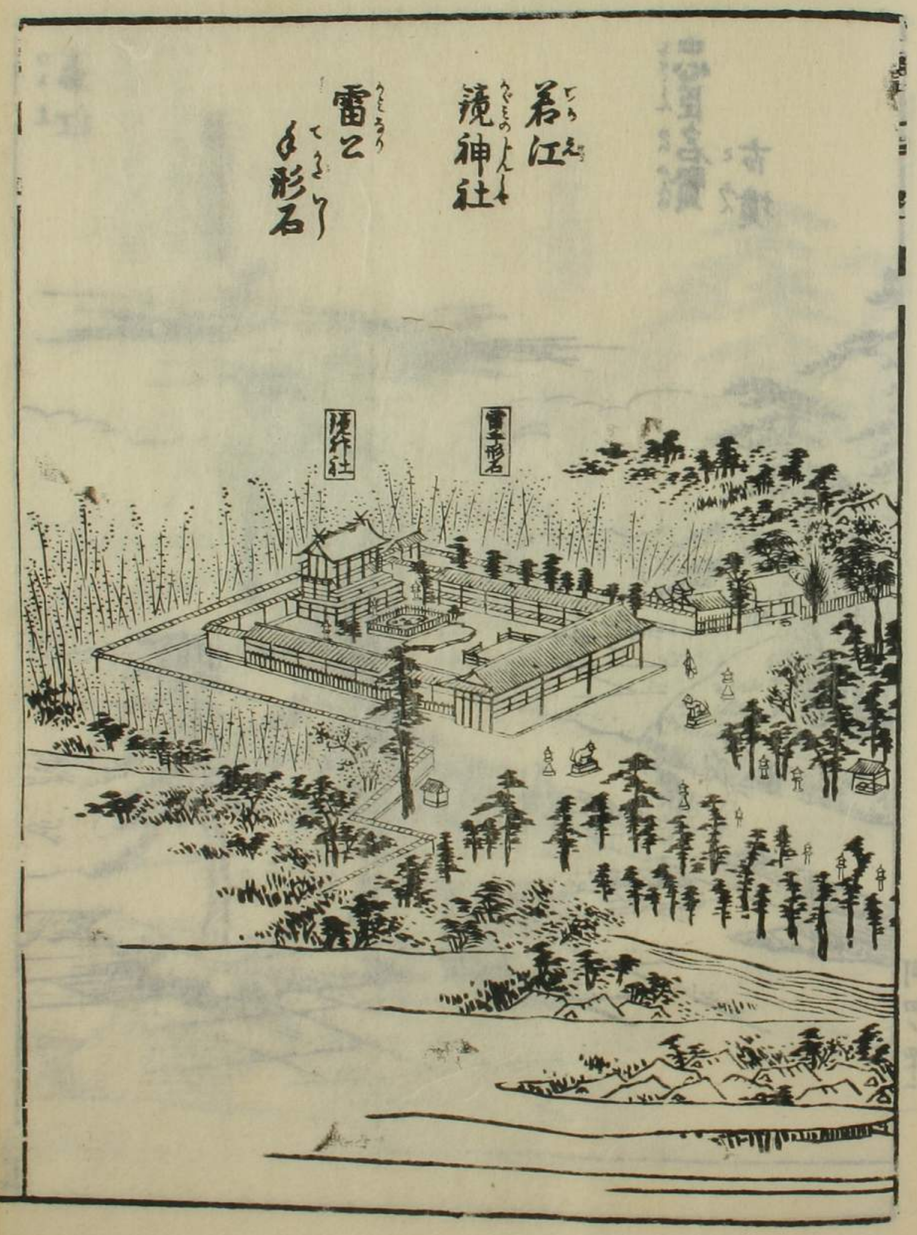
栗栖神社　八尾西郷村ふあり　延喜式出三代實録云　貞観四年
授従五位下　日十一月　勅預官社　今天王と称ふ　武佐の生土神

八尾天満宮ハ
文長年中
于桐東市正
造立せられ
明和四年
高辻殿神宴
御参詣
遊ばされ



八尾
御堂

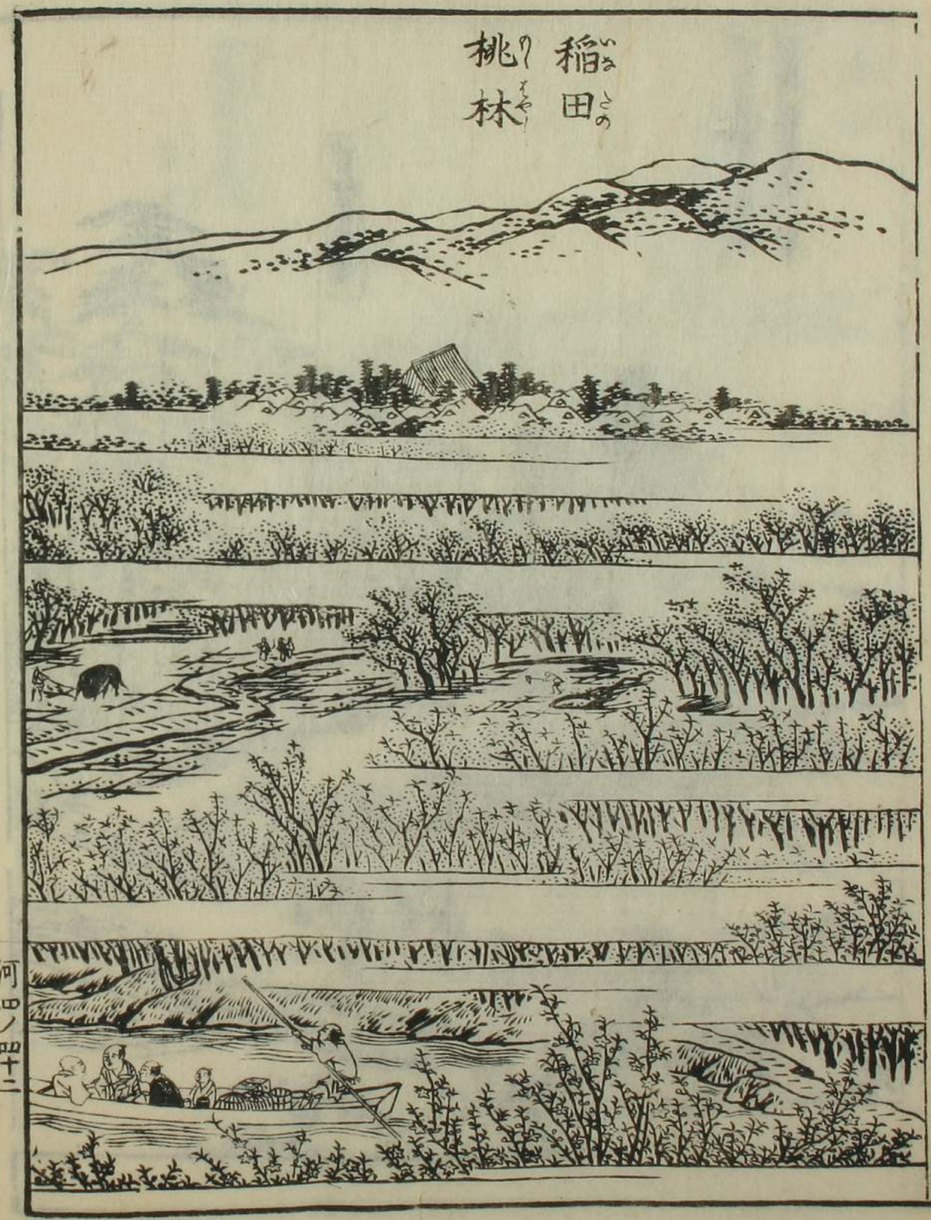



若江
境神社
雷乙
女形石
境神社
雷乙女形石

下長瀬
瀬川
河内八景十

若江
忠臣名賢古墳
木村重成墓
河内ノ野

山口伊豆度墳
今古英雄俱寂寞
斷碑零落後人看


稲田の
桃林

譙家年少
野村西
沙岸停舟
路欲迷
十里桃林
花未落
始知身到
武陵溪
生駒山人

奈良御道

麥江
中村
神社

高井田
長榮寺

長柄神社 長八尾村ふあり 鎏延喜式出今天王寺脇ふ鎮ます

玉串川 志紀郡より流れ中郡の東より西の都家中野築合荒ふ堂を経て 餌田あそ 茨田郡 渡辺川ふ入一名遍川

摂津州 たかちてのこそろ社川 ぬ名ちてのこそろ社川

坂合神社 小坂合村ふあり 延喜式出三代実録云 元慶七年十二月授従五位下ヲ 式所の生土神 寺護代 寺居城

若江城墟 初畠山義深の家臣遊佐ヒ 寛正以来政長義就更互ふ居城し 永禄の末 郡 境

天正の初光ふ亦ふ居城し 庄系を支三好義継ふ居城し

堂振村も亦城址なり

若江鏡神社 若江村ふあり 延喜式出 文徳実録曰 斉衡元年四月授大雷火明神ニ従五位下ヲ 上若江ふ下若江ふ村の生土神之例 系八月十一日

雷神石 神祇ふあり 土人雷手形石 又古代の祭礼石 焼畑神ふあり

加津良神社 萱振村ふあり 延喜式出三代実録云 貞観九年二月頃 式所の生土神 祭神の

時ふ生土の宮 神祇ふ 松明を振る 神をいさめ 故ふ

萱振の名なり 又地蔵院の本尊 阿弥陀の画像 恵心の手

毘沙門堂其外

伽藍の旧跡あり

石田神社三座 岩田村ふあり 延喜式出 今八幡宮 式所の生土神

中ふ式岩社あり 社傳曰 欽明天皇の御宇 式亀の田園の

これふ式岩社 其上ふ三神出現 祭神

建久弾正忠

彌刀神社 近江堂村ふあり 延喜式出今天王寺脇

式所の生土神

門俣神社 鎏数延喜式出 門俣村ふあり 式所の生土神

応神紀ふ門俣の和奇あり

宇波神社 延喜式出 加納村ふあり 今熊野と称

式邑の生土神

長門守木村重成墓 上島郡西都村ふあり 元和元年五月六日 ふ戦死 年廿六歳

忠臣伝賞して墓を築る 其石表曰 長門守木村重成之墓

史記云

木村重成ハ豊臣秀次公の近臣 木村常陸助乃子 秀次公の聖ふ

於く市生害の時 父常陸助も亦ふ於く切腹 常陸

助の妻 後ふ豊臣秀頼公の乳母 重成を胎く已ゲ故郷 近江の馬渕ふ塾居し

母渡く重成を養たまふ 大寺六角宰相義郷 を佐々木ふ

名家にして 秀次公ふ竹馬の朋 特ふ木村と同姓 れば

常陸助ゲ好ふ重成五歳の時 已ゲ居城ふ招く 夏籠せ

年實子ハ如し 成長ふ従ひ軍 学ぶ孤 練し 鞠 畢を学び孫呉

胸中ふ湧く若年 聰明 智 して武功世ふ高く忠肝義胆

の名将 称誉せり

木村自筆の書は今井村荻野氏にあり其文云

以文人申上候扨は此度出陣に付上坂之人たのミ候て能見届よく
御家に申候御申候て武家は格意有之死候は名
門十郎事は無頼候て為かゝみ候て申候中は平野殿へ見と申
越去る御座候て候て御申候て申は右十郎殿へ御座候て申候は
帰君之事一段申候抱置候も見とゝけ候て孫々は世話に
候而一入心よく候て申候は旦夜の縁られ申ます
所存可申候ぞはかれて

一白
さみられやまひてこそ夜はわかしきます
一包

一甲
一浅黄人硯箱
一蒔絵香盆
一兼光ノ刀　一腰
一同小脇指　壱腰
一金子　一包

右之通日名門十郎方に私のかたみに遣申候於右
仕官成不及御筆にて渡候

元和元年卯五月二日　木村長門（花押）

荻井利右衛門様

伊豆守山口重信墓（いづのかみやまぐちしげのぶのはか）若江村木村重成の墓の十丈間許にあり元和元年五月六日暁天に重成と組合して戦死す弟は但馬守多々良

弘隆讀抄纂く鳴サ弐丈許臺石二聯亀趺蓋不碑ノ郷ニ石ニ鏤あり篆額かよみ播龍二尾ヲ鏤ム碑銘ハ羅山子篆額ハ石川丈山ガ書なり

山口豆州牧碑銘

民部卿法印道春撰

參陽隠士石川丈山篆額

禮曰父母全而生之子全而歸之是孝也又曰
戰陣無勇非孝也二者不可得兼捨生而取義
者也元和元年攝州大坂之役山口伊豆守重
信與父修理亮重政共副別將井伊氏之先鋒
到河州若江逼五月六日昧爽與寇相過父子
競進不避來銃最初合鎗短兵急接寇擾其首
重信亦戰沒從者共死時年僅二十有六可謂
戰陣者勇乎嗚呼痛哉惜哉重信舍弟但馬守
弘隆告之故如是旦蘗裡掩覆之後立重信碑
于其死所其姓多多良其氏山口重政娶源雄
吉女誕重信于尾州清洲慶長二年重信八歲
始拜
台德院大相國肉　命更小字曰長次郎以仕
左右九年十一月十五日重信十五歲隨俗例
初戎衣祝之也十四年十二月　命叙從五位
下班伊豆守十五年秋於上野國賜采地十八
年春重政有故忤旨潜居武州入間郡河越蓮
馨寺重信從焉十九年冬關將有事于大坂而
父子欲往敢死到箱根關吏不許過焉乃帰寺
重信又改名伴爲商旅於經東山道獲赴大坂
時業巳和平後東行還寺及翌年之戰也夫[illegible]

是則與身體不毀傷全而歸之者雖以有以賞
然戰陣有勇則不可謂非孝乎古人求忠臣寸
孝于之門良哉嗚呼哀哉惜哉其雅號曰傑山
宗英居士吁置其小影處曰大雅弘隆屬余
書其事于石再三弗措於是為銘銘曰
吁浪連城恃險聚兵義旗一麾
厥角如崩有一勇士重信為名
先登揮戰獲却敵頸取義惟重
授命既輕伊人雖沒宛爾如生

正保四年丁亥五月六日

山口但馬守多多良弘隆建

稲葉里

王井新田菱江の間ふあり

[illegible]

仲村神社

菱江村ふあり延喜式出三代實録云貞観九年二月頒二官社
氏地の生土神とゝ例条九月廿七日疱瘡流行の祈れい案意
治する事多し

鴨高田神社

高井田長栄寺の境内ふあり今八幡と称して氏村の生土神とゝ
延喜式出例条九月十六日氏寺年久しゝ廃る中ふ
寛延年中葛城慈雲和上の建立ふり